
白騎士物語-新たな契約者-

天孤

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白騎士物語―新たな契約者―

【Nコード】

N0249Q

【作者名】

天孤

【あらすじ】

俺の名は“アルミ―シユ”。突然だが俺はある日、死んじまった。そこから俺は何故か転生することになってしまった。しかも転生先はなんと、俺が大好きなゲーム『白騎士物語』だったのだ！！そして転生した俺は原作を破壊するため世界を回る。そんなお話……。・。 ※シンナイトの変身時の呪文？を変更しました。

第0話 神との遭遇、そして転生（前書き）

今回はゲームの“白騎士物語”を破壊していきたいと思いますww
自分もやってるんですが、やっているとちょっと書きたくなつたので、
今回書かせてもらいました。

まあたぶん駄文になる可能性大ですが、ほどほどに見てやってください。

※シンナイトの変身時の呪文？を変更しました

第0話 神との遭遇、そして転生

— — — — — side — — — — —

『あなたは死にました』

「・・・・・・・・・・は？」

そんな言葉で驚愕した俺は一瞬思考が止まってしまった。
正直、起きた瞬間そんなこと言われても、どう返していいかわからない。

「・・・・・・・・・・なんで、という前に、あんたは誰なんだ？」

『あれ？以外に冷静ですねぇ。もっと騒がれると思いましたのに』

「まーな。騒いでも、この状況が変わるわけでもないだろう？」

俺はそう言いながら周りを見渡した。

さっきは混乱していたので気付かなかったが、全方位真っ白だということに気づいた。

それ以前に、この真っ白さに今まで気付かなかった俺もどうかと思った。

『ここがどこだか、気になりますかあ？』

どうやら俺が気になっていることに気づいたようで、相手は俺に聞いてきた。

というか、この状況が気にならない奴がいるなら、俺は見てみたい。

「そりゃあ気になるだろ？ あんたの事も含めて全部説明してくれ」

『……そうですね。まず私の事から説明しましょう』

そう言うときついのは、威厳のある声で言った（つもりらしい）。
けっこうアニメ声なので、威厳も何もないが……。

『私の名前はミリア。地球担当の下級神ですう』

「神？ アンタがか？ ミリアなんて名前、聞いたことないぞ」

『・・・・・・・・わたし、地味ですから』

「・・・・・・・・なんか・・・ごめん」

ミリアはそういうが、見た感じすごく可愛い。

髪は金髪で、目は大きくクリツとしていて、体なんかボンツ、キュ、ボンツである。

身長は大きくもなく、小さくもなく大体168センチぐらいだろうか。

全体的に見てもバランスがよく、可愛さもあり色気もある、そんな女性だ。

これのどこが地味なのか世界中の女性に聞いてみたい。

「俺は可愛いと思うがな・・・」

『あ、ありがとうございますう／＼／＼／＼／』

赤くなった所も可愛いな。ま、それは置いといて、そろそろ説明を頂こう。

『そうですね。そろそろ次の説明にいきましょう』

「そうだな・・・・・・・・って、なんでやねーん」

『きゃー!!』

俺は思わずつつこんでしまった。

俺はまだ喋ってないのに、何故かミリアに先に同意されてしまった。
これをつつこまずして、何が関西人だ!! 別に関西人じゃないけど・
・・。

『ちょ／＼そ、そこは、胸ですう／＼! いつまで揉んでるんですか
あ／＼／』

「おっと、なにか気持ちいいと思ったら・・・」

まさかつつこんだと思ったら、何時の間にか揉んでたぜ。
まさに魔性のおっぱいだな・・・。恐るべし、おっぱい!!

『と、とりあえず離して下さい／＼／／』

「そうだな」

俺はそう言々とミリアの胸から手を離した。

『いきなりなんで揉むんですか！むううううう』

ミリアはそういうと頬を膨らませて怒ってきた。

なんか小動物みたいで、可愛い。いちいち可愛いなあ、こいつは。

「お前のおっぱいが悪い。なのでお前のせいだな」

『ええええええ！？わたしの所為なんですか！？』

「というか早く説明しろ」

『無視ですか！？無視なんですわね！？』

「・・・・・・・・・・」

『本当に無視ですか・・・・・・・・うう・・・・・・・・まあいいですう・・・・』

俺が無視しはじめると簡単に諦めたようで、ミリアは説明し始めた。

『さっき私が喋ってない貴方に同意できたのは、貴方の心を読んだ

からです。

まあこれでも私は神ですから、こういう力を持っていたとしても不思議ではないでしょう?』

「まあそうだな・・・」

『分かってもらえてよかったですう。まあこの話はここまでにして、次の話に移りましょう』

俺は頷いた。

『貴方が先程聞いたこの場所は、地球ではあまり知られていない場所ですう。

まあ簡単に言うなら、私たち神が住む次元“天界”といったところでしょう。

天国や地獄、地球といった世界とはちがう他の次元に存在している、

地球人に認識される事は99, 999%ありません』

「じゃあ何で天界に俺はいるんだ? 99, 999 認識されないんだろ?」

『超偶然あなたが天界という次元を、鏡を通して見てしまったからですう』

「見たにしても、何で俺は死んだんだ？」

『天界は地球より上位の次元に入ります。地球人の貴方が高次元の天界を見てしまえば、

脳がその次元に耐えられる筈がありません。死んだのは、それが原因でしょうね』

「死んだなら天国や地獄に行くと思うんだけど・・・」

『それは貴方が天界を見て、存在の格が上がったためでしょう。

上位に当たる天界に一瞬でも触れれば、貴方の魂が天界に慣れようとして、

格が上がったのでしょうか。今の貴方は半人半神みたいな状態で
すう』

まさか半分人間をやめてしまったとは・・・。

まあ半分神だからいいけどねww

後々便利な気がするし・・・。。。。。。
というか、この後どうすんだ？

『それも説明しましょ』

「心の中読むなよ。プライバシーの侵害だぞ」

『まあ良いじゃないですかあ。とりあえず説明を続けますう。』

私たち神は、偶然天界に関わってしまったがために、死んでしまった貴方に、

もう一度人生をやり直させるために手を差し伸べることにしましたあ』

「おお!! 生き返れんのか!!」

『はい。しかし元の世界には戻れませんが……』

「……生き返れねえのか? 地球には」

『何故かというと、貴方の格が少し上がったためですう。』

半人半神という存在は地球人より魂の質自体が違いますう。

そんな貴方が元の世界に戻ると何の影響を与えるかわかりません。まあ元より貴方は地球ですでに死んだ存在なので、戻れませんが』

「……そうか」

『以外にサッパリしてますねえ』

「まあな。刺激のねえ世界なんて、こっちから願下げだ。それでどうなるんだ？俺は……」

『そこで貴方には異世界に行ってもらいましょう、ということですよ』

「……異世界ね」

『嫌ですかあ？異世界』

「嫌じゃないが、どこに行くのかなと思ってな」

『勝手に決めてもらって良いですよ？
それにこっちの責任でもあるのでいくつかの能力が与えられます』

「そうなのか？といってもなく……」

どこでも良いのかあ……。
といってもあまり危険すぎてもすぐ死んじゃう可能性があるし、
どこにしようか……、うんすごく悩むなあ……。

『とりあえずこちらも準備があるので、それまで考えていてくださいねえ』

俺が悩んでいると、ミリアはそういつてどこかに消えてしまった。
俺はそれを確認するとどこに行くか、能力を何にするか悩み始めた。

――――3時間後

「よし！決めた！」

『きゃ！？い、いきなり大声あげないでください！』

「すまんすまん」

『まあいいでしょう。それで決まったんですかあ？』

「ああ。行く世界は二次元でもいいんだよね？」

『はい。1時間前にも言いましたが、行く世界はどこでも良いです

し、

能力は4つまでという事で決まりましたので、伝えましたが・・・
』

「俺が行く世界は・・・」

『行く世界は・・・(ごくり)』

「・・・・・・・・」

『・・・・・・・・?』

「・・・・・・・・」

『・・・・・・・・どうしましたか?』

「・・・・・・・・ぐうゝZZZ」

ズターーーン

『・・・って、なに寝てるんですかぁー!!』

「・・・・・・・・っは!?! Σ (。;;)」

『やっと起きましたか・・・・・・・・』

「・・・・・・・・ごめんなさい」

『まあいいです。それでどこなんですかぁ?』

「おお!? そうだったな! おれの行く世界は・・・・ “白騎士物語”
だ!!!」

『白騎士物語? それってゲームのですかぁ?』

「ああ。そこで俺は原作を破壊したい」

『能力はどうするんです?』

「あそこは戦いばかりだからな、能力を上げる“能力”にした。

まず一つ目は身体能力の限界をなくすこと。
これはやっぱり鍛えるほど強くなりたいからな。これは必要だろう。

二つ目は全ての才能が開花する可能性。

これは自分がすること、例えば剣術にしても魔法にしても、才能がないとあの世界では生きていけないからな。

といっても可能性だから、出来ないことも少しはあるかもしれないな。

三つ目は俺にシンナイトをくれ。これはアークナイトではダメだ。何故かというレナード達に関われる可能性が少なくなるし、シンナイトのほうがいいしな！

ゲーム内では5体しか出てこなかったが、もう1体くらい作られていても、

おかしくはないだろう。でも一応全員の記憶を弄っていてくれ。

最後に4つ目は悩んだが、出会いの才能というか能力をくれ。これは転生しても出会いがなければ、物語に関われないしな。それに男としてはハーレムを作りたいしな」

『最後のはどうかと思えますけど……。まあ良いでしょう。全部それでいいんですね？』

「ああ。ちなみに俺も他の契約者と同じで、ドグマホールの神殿から発見されるようにしてくれ。

シンナイトはそうだな……。神殿のどこかに隠しておいてほしい。誰にも見つからないようにな」

『わかりました。あとは名前ですけど、新たに決めてください』

「そういえば、前世の名前が思い出せないんだが・・・」

『死んだ時に、前の名前は使えなくなります。だからでしょう』

「そうか。名前、といってもな・・・何にしようか・・・」

『感じたままに決めたらいいですよ』

「そうだな・・・ある・・・み・・・しゅ・・・!? そう、俺の名前は“アルミーシュ”だ!」

『“アルミーシュ”ですか? いいなまえですねえ』

「まあな」

『最後に容姿を決めてもらいます』

「かつこよくしたいからなく。・・・じゃあ、身長は182cm。暗い赤髪でレナードみたいな髪型でツンツンヘヤーの、纏めた後ろ髪は腰まで届くロング。目は鋭いようで、優しく金色の瞳。」

体は筋肉質だけど、締まっている細マッチョでよろしく!!」

『け、けっこう、注文がありますが、いいでしょう』

「まあ健康的に育った体がそうなる可能性があるだけで、不健康に生きるとならないしな。それだけで頑張ろうと思える」

『原作開始時に何歳になる予定なんですか？決めないと次に進めないの』

「そうだな・・・年長のグラーゼルが22歳だから23歳でいいかな」

『わかりました。最後に貴方が使うシンナイトについて決めてください』

「これは地球の英雄でもいいかなと思って決めてたんだ」

『なんなんですかあ?』

「アーサー王」

『アーサー王ですか……。これは地球では有名な人ですね。シンナイトへ変身する呪文は決めてあるんですか』

「ああ。

“古の聖剣を抜きし異なる世界の王アーサーよ、我に力を……。変身！！”

って感じかな」

『おお！！いい感じじゃないですか！それで決定ですね！』

「ああ。これで終了だよな？」

『はい。これより力を授けたいと思います。授けてもそれが目覚めるのは、

あちらの世界に着いてからですので、ご安心ください』

ミリアはそう言うと言った俺に向かって手をかざすと、ぶつぶつ何かを唱えだした。

しばらくするとミリアの手から光が漏れ出し、飛んでくると俺の胸に吸い込まれた。

「き、きもちわりい………」

『まあ貴方にとっては、異物でしかありませんからね。
あちらの世界に行けば適応されるので、大丈夫でしょう』

ミリアはそう言うと言をパチンツと弾いた。
すると俺のしたに黒い穴が………、

『ではでは、次の人生楽しんでください♪』

「てめえええええええ、ぶっころおお………」

俺は最後まで言えないまま、暗い穴の中を落っこちていった。
落ちるときニヤニヤしたミリアの顔は、ものすごく……ウザかった。

— — — ミリア・・・次に会った時が、お前の死だ！！！！
(怒)

『(ぶるっ) なにか寒気がありましたか・・・気のせいでしょう
♪』

続く

第0話 神との遭遇、そして転生（後書き）

結構長くなったと思います。

まあゼロ魔の二次もやってるのでどうなるかわかりませんが、

応援よろしくお願いします!!

第1話 シンカ村そして王国へ（前書き）

まあ別に書くこともないんですけどね

何となく前書きって、書きたくなるような、ならないような・・・。

いま、どっちなねん！！と思った人は、ツツコミができてると思いますww

まあ何となく読んでみてください。

どうぞ～

第1話 シンカ村そして王国へ

――――シンカ村

全てがはじまったとされる、今は廃墟となった小さな村。その名もシンカ村。

シンカ村はバンヘイブン荒野と呼ばれる場所に存在する。

それより17年前のシンカ村。

その村にはある男が住んでいる。

その男の名は“ミディアス”

シンカ村の村長で周りからの信頼は厚く、頼れる男だ。
彼を信頼する人間は世にたくさんいる。例えば……、

バランドール王国、ヴァルトス王。

自由都市グリード、ドリスドル伯爵。

その他にも彼を信頼する人間はたくさんいる。がここは置いておく
としよう。

そんな村長ミディアスが住んでいるシンカ村、そんな村の近くで今

日事件が起こった。

突然の揺れ。ミディアスは最初ただの地震と思っていた。

揺れが収まり、シンカ村の住民は、そのままいつもの生活へと戻る。

しかしミディアスはシンカ村の近くで世界最大の古代遺跡ドグマホールを見つけてしまった。

しかもドグマホールからは4人の赤ん坊と、5歳と6歳ほどの少年が2人、

その全員がコールドスリープ状態で発見されたのだった。

同時にドグマホールからは、遙か昔に滅んだ古代文明、

イシュレニア帝国が作り出した戦闘兵器。シンナイト“白騎士”が発見された。

シンカ村の住民達はその赤ん坊と少年2人を保護し、育てることにした。

白騎士はその後バランドール王国によって持っていかれ、ヴァルトス王の命によって、城の地下深いバランドールの宝物庫に封印された。

本来5人しかいない契約者。

しかし異世界からの介入によって、契約者が6名に増えたいま、さらに過激化した物語の火蓋がいま切られようとしている。

シーザーとレナードもサッカー教えたら、すごく嵌っちゃって、暇があつたら誘いに来るもんな。

いやー、義妹たちも可愛いけど、義弟たちも元気があっていいことだねえ。

グラーゼルというか、セティだけど、こいつだけは一応4人より年上ということで、

しっかりしていると思う。まあ俺が一番年上だから時々いろいろ相談してくるけど……。

セティは皆に優しいからなあ。まあ少し優しすぎると思うけどね。

知らない人にはグラーゼルという存在がよくわからないと思うが、まあその辺は後々出てくるので、気にしないでほしい。

最後に俺だが簡単に説明していきたいと思う。

まず天界より転生して、コールドスリープから目覚めたんだが、その時、目を開けた瞬間、おっさんが目の前にいたので、思わず殴ってしまった。

そいつがシンカ村の村長、ミディアスと知った時は驚いた。

最初に出会った人間が、誰も物語のキーとなる人物とは思わないだろう。

とかかチカチに凍っていたはずなのに、体が普通に動いたことに驚いた。

その時思わず「カッチカチやぞ！ゾックゾクするやろ！」と言ってしまった俺は悪くない筈だ。

俺の名前はアルミッシュのようで、安心した。ミリアは何をしでかすかわからん。

そして、そこから1年間は文字を覚えたり、生活をするための術を学んでいった。

もったかかると思ったが、才能がいろいろ開花したのか、どんどん学んでいった。

やはり能力があればいろいろ便利だと思った。

といっても努力をしなければ、この能力は無駄になる。

この能力があるだけでいろいろ学びたいと思ってしまった。

7歳からは薬草など医学的なことに手を伸ばし始めた。

最初は近所のおばさん達に、傷がすぐに治る薬草や、

麻痺や毒に効く薬草など、いろんな事を教えてもらった。

同時に朝昼夜と1時間ずつ筋トレを始めた。剣術を始めたかったのだが、

まだ体が十分に出来ていないので、成長を阻害しない程度に筋力をつけることにした。

8歳になると薬草は大体覚えたので、次は魔法について学ぶことにした。

魔法には神聖魔法と精霊魔法がある。

まず神聖魔法とは仲間の体力や状態異常を回復させる魔法である。殆どが補助に使う魔法で、剣や槍と併用して使うと便利な魔法である。

これは薬草などと合わせて使うと効果が上がりそうなので、研究しようと思う。

次に精霊魔法とは「炎」「水」「風」「土」など、各属性を自在に操る攻撃魔法である。

これは攻撃魔法が主で相手を状態異常にさせる魔法などもあり、覚えたら大型の敵を倒すとき便利である。

精霊魔法を覚えるのはなかなか難しく初級魔法と中級魔法を半分くらいしか覚えられなかった。

神聖魔法の方は、薬草など医学的な事を学んでいたことがよかったのか、

大体の事は覚えれた。

といってもまだ70%ぐらいしか覚えていないので、まだまだ修行がいるだろう。

精霊魔法なんかまだ全体の40%ぐらいしか覚えてないし……。

これだけ魔法を覚えるのに2年もかかってしまい10歳になってしまった。

といっても9歳から木刀モドキを作って、素振りもしていたので、それがなければ、もう少し覚えれたかもしれないが……。

10歳になると素振りもまだマシになってきたので、剣術を学ぶことにした。魔法も学びながらだが……。

しかし刀を使う人がシンカ村にはいなかった。なので自分で作っ

やおう！ということにした。

どういう事かというと、自分で“○○流”みたいに本家本元を自分にして、

我流で剣術作ろうぜ！みたいな感じである。名前は“神華流”にした。

何故“神華流”かというと、やはりシンカ村というのもあるが、あのミリアという“神”より“華やかしく”という意味を込めて“神華流”ということにした。

と決まったら、やはりこう・・・目標、というか・・・その、思想という物を決めないと始まらないだろう。

やはり俺は男としては“最強”を“神華流”の目標にしたいと思った。

男なら一番強くならなきゃ駄目だろう。目指せ“最強”！！

そんなこんなで11歳。

魔法は1年前と変わらないが、剣術の方は特に力をいれていたのも、何とかジャッカルを倒すぐらいには成長した。

ジャッカルというのが実際に見ると、熊にしか見えない。

速いし、力強いし、何だと言うのかこの世界の生物は！恐ろしすぎる！

まあいい。11歳にしては天才的だろう。才能はあっても体格差だけはしょうがないと思うし、

今後の成長に期待をしたいと思う。まあ一応決まってるんだけどね。身長とか、いろいろ。

こんな事を考えているうちに、ミディアスは皆の記憶を封印したようだ。

「……といつても俺は魔法防御が強いから、記憶なんて封じられないけどね。」

まあ一応聞いたフリしてなきやね。じゃあ、おやすみ。ZZZ

あ！一応言っとくけど、“神華流”は抜刀術を主に、日々鍛錬してまゝす！

あ！一応言っとくけど、“神華流”は抜刀術を主に、日々鍛錬してまゝす！

[illegible]

あ！一応言っとくけど、“神華流”は抜刀術を主に、日々鍛錬してまゝす！

あ！一応言っとくけど、“神華流”は抜刀術を主に、日々鍛錬してまゝす！

起きたら死にかけのじーさん、ばーさんの屋敷に預けられました。家じゃないよ。屋敷だよ。

場所はバランドール王国。ちよ、まさかの主人公と一緒に！？

起きたら死にかけのじーさん、ばーさんの屋敷に預けられました。家じゃないよ。屋敷だよ。

場所はバランドール王国。ちよ、まさかの主人公と一緒に！？

起きたら死にかけのじーさん、ばーさんの屋敷に預けられました。家じゃないよ。屋敷だよ。

場所はバランドール王国。ちよ、まさかの主人公と一緒に！？

しかしなんとこのじーさん死にかけたが、バランドール王国の公爵らしい。

しかしなんとこのじーさん死にかけたが、バランドール王国の公爵らしい。

今はこんな死にかけたが、昔は近衛騎士団長もしていたらしく、結構な腕前らしい。

今はこんな死にかけたが、昔は近衛騎士団長もしていたらしく、結構な腕前らしい。

ていうか今でも強いらしく、服を脱げばマッチョマンだった。一瞬亀○人かと思っただぜ。

じーさんも昔、刀を愛用していたらしく、宝物庫にはいろんな刀が置いてあった。

最高の刀を1本拝借しようとしたが、じーさんに「ワシに勝つまで、これはやらんわい!!」と、

宣言されてしまい、その日からじーさんとの特訓の日々が始まった。

そういえばこれは後から聞いたのだが、じーさんとばーさんの間には子供はいないらしい。

という事は俺が継ぐことになるので、少しめんどくせーと思ってしまった。

それにここに縛られてしまうため、行動範囲が狭まってしまうため困ってしまった。

それをじーさんに言ったら、

「ワシから1本取れるようになったら、ある程度、自由にやってってもええぞ」

と言われた。

なんというジジイだろうか。

簡単そうに聞こえるが、実際に相対すると、覇気みたいな物が飛んできて動けなくなる。

正直これはきつい。しかも動きがジジイの動きではない。速すぎて見えない。

このジジイは正直人間ではないだろう。化け物級である。

一本取るまでに、何年かかることやら・・・はあ・・・。

こんな風に新たな生活は始まっていったのである。

続く

第1話 シンカ村そして王国へ（後書き）

シンカ村で終わろうと思ったのに、

次のところまで来ちゃったのでビックリしました。

まあ今回もまあまあ長く書けたのでよしとしましょう。

第2話 自由 ※挿絵あり(前書き)

今回ちょっとグロツと思う表現があると思いますが、

まあ、気にしないでください・・・・・・。

第2話 自由 ※挿絵あり

— — — — — side
アルミーシュ

「でえい！」

キーン！！

「そりゃッ！」

ガキンッ！！！！

「どりゃあああああッ！！！」

スカッ

「大振りになっとなぞ！アルッ！！！」

「わかつとるわ！！ジジイ！！！」

オッス！！みんな元気にしてたか？久しぶりだな！

みんなのお兄さん、アルミーシュだ。え？そんなに久しぶりでもないって？

そっちでは一瞬かもしれないねえが、こちらではもう5年も経ってる。

もう16歳だ。

このジジイなかなかしぶとくて、全然勝ちを譲りやがらねえ……。

いまはこの5年の卒業試験というか、そんな感じの事をしている。これでジジイから1本取れれば、俺に自由が舞い降りるってワケだ。

そういえばジジイと婆さんの名前を覚えてなかったなあ。

ジジイは“バルトス” 婆さんは“マリア”。

婆さんの方は優しい祖母みたいな雰囲気を出している人だが、ジジイは意外に頑固で結構めんどくさい人だ。手加減と言う物を知らないだろう。

日々の鍛錬で俺はジジイからフルボッコされているが、そのおかげで俺の剣術は5年前より、比べ物にならないくらい強くなっただろう。

しかしなかなか取れないのだ。その1本が。別に条件が勝つとかでもないのだが、それでも1本取れないのである。

だが今回の俺は一味違う。

ジジィに勝つため、5年前から試行錯誤を繰り返し、とうとう必殺技が出来上がったのだっ！！

記念すべき“神華流”一つ目の奥義である。その名も、“神華流抜刀術『神風』”

神風はまず、右足を前、左足を後ろにして、腰位置を下げると抜刀の構えをする。

そこから右足に体重をかけ、そこから前に倒れるようにして、完全に倒れる前に、地面を右足でおもつきり蹴り、敵の横を通り抜けるとき、抜刀し切りつける、といった奥義だ。

これは足に力をギリギリまで溜めたエネルギーと、倒れる時の重力を合わせ、

それを一気に爆発させて、人間離れたスピードを出す技である。

今回これを出してジジィに勝つのだ！この野郎！

「ジジィ！受けやがれ！」

「む！？」

————— “神華流拔刀術『神風』”

「っは！」

びゅん！！

「つく！？」

正直これを出しても、ジジイに当たったか、わからねえ。
俺は結果を聞くため後ろを向いた。

「アル」

「・・・何だジジイ」

「・・・お見事」

・・・バタリ

「!?おいジジィ!大丈夫か!」

「大丈夫じゃ・・・。少し疲れただけで、特に異常はない。にしてもこれだけの運動で、

疲れてしまうとは、ワシも年をとったもんじゃ・・・。」

そう言うときジジィはよっこいしょ!と立ち上がり、こちらに向き直った。

「これだけ出来れば、十分じゃ。ワシに教えることはもうない。

これからは自分でいろんな事を経験し、学んでゆけ。ここに残ってもよし、

世界をまわって知識を蓄えるのもよし。自由にせい」

「・・・ああ。・・・いままで、ありがとうございました!」

俺はそう言うとき頭を下げた。

「おぬしが頭を下げるとは・・・・・・キモイのお」

「うつせえ！くそジジィ！」

「はん！この若造が！」

俺たちはその後4時間ほど戦い続け、最後には婆さんにぶっ飛ばされ、次の日まで正座させられた。

「……おぬしの所為じゃぞ」

「……お前だろうが」

————ぷちっ

「おぬしじゃろうが！！」

「何だと、この野郎！！喧嘩売ってんのか！！」

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴ！！！！！！

「二人とも………死にたいんですか？」

「アル」

「どうした？ 爺さん」

「おぬしに旅発つ餞別として、これをやろう」

「？ なんだこれ」

爺さんは布に包まれた棒のようなものを渡してきた。

俺が布を取ると中から、鞘から唾まで全部真っ黒の刀が出てきた。

「刀じゃねえか！ しかも、あの宝物庫で一番の業物の！ いいのかよ！？」

「その刀の名は、見た目のとおり“黒刀”。刀の中では一番硬く、折れにくい。

しかも切れ味は最高で、油が付きにくいので切れ味も落ちにくい」

「そんなもん、貰っちゃっていいのか？」

「どうせワシはもう使わんからな。使われたほうがその刀の為にもなるじやろう。

道具は使うためにあるもんじゃ。大事に使ってやってくれ」

「・・・そうか。ありがとな、爺さん。大事に使わせてもらうぜ！」

俺はそう言うと刀を左腰に差し込んだ。

ちなみに俺の格好は、自分で考えた服にもらった。

ズボンはBL〇ACHの死覇装みたいで、上着は左半分がなく、お腹には白い包帯を何重に巻きつけている。

右肩にはマントが取り付けられていて、腕には指だけ出ているグローブをつけている。

腰にはズボンを止めるための布が巻いてあるので、そこに刀を差しである。

その上に旅をするとき、熱や砂漠の砂嵐から体を守るためローブを羽織ることにした。

ズボン、上着は黒で、マントは赤、グローブは藍色、ローブは真っ白である。

>i16642—2062<

「もし何かあったら、帰って来るがいい。ここはお前の家じゃ」

「ああ。じゃあ行ってくるぜ！」

俺はそう言うと、パーも村を目指すためブラスタ平原へと繋がる南

ブラスタ平原には主に、ポルカ族、バケット族、ジャイアントビー、トロル、トレントがいる。

時にはトロルキングやアイスエレメントがいるが、稀に見ることはない。

ポルカの王様などボス系統のモンスターもいるが、それはクエストによって討伐されたりする。

俺はバランドールを出る前に、ギルドで賞金首を討伐する依頼を受けた。

ギルドでの登録は、爺さんとの修行時、モンスターとの実戦経験をする時に、

ついでにクエストとか受けたら、一石二鳥じゃね？という事で登録は済んでいた。

賞金首を討伐する為には、まず依頼を受けてから、現地へ行きモンスターを倒す、という事になる。

倒した後、ギルドへ報告すれば賞金が貰えるので、それで生活を潤おす人間も少なくない。

賞金首とクエストは少し内容が違う。

賞金首は住人達に迷惑をかけるモンスターを討伐させるため、国が依頼するもので、

クエストは個人が、何かを取ってきて欲しいとか、こんなモンスターを倒してほしいとか、

そういう事をギルドに依頼することである。

ギルドにはランクと言う物があって、G～Sまであるらしい。ゲームでは1～30と言う風に分かれていたが、こちらではこんな感じらしい。

いま俺は爺さんとの修行時、何度かクエストを受けていたので、ランクDである。

あまり受けてなかったので、ランクはあまり上がってないが、これから上げていこうと思う。

ちなみにギルドは自分で作れて、ゲームでは国に1つずつ位しかなかったが、

バランドールには幾つかのギルドがあった。

有名などころには依頼がどんどんやってくるが、弱小ギルドにはあまり依頼がこない。

俺がいま依頼を受けたりする所は、国が運営しているギルドで、国に關係する依頼が多い。

依頼を完了したら、どこのギルドでも依頼確認できるので便利だ。

ギルドを立ち上げるためには、ギルド長がランクAまで上がってないと駄目なので、

早くギルドランクをAまで上げて、自分のギルドを上げたいものである。

この旅はギルドのメンバーを集めるのも兼ねている。

話は戻って賞金首だが、俺はパーモ村に行く前に、“蛮族の狂王”というのを受けた。

トロルの赤いやつで、名前はプリアレオス。弱点は刺突・土、耐性は斬撃・風らしい。

報酬金は750G。

報酬アイテムは虎鉄（両手刀）、刃金の珠玉【七級】×1、守護の珠玉【七級】×1。

別に虎鉄はいらないが、後々使うときがあるかもしれないので、いだろう。

「……………でことで、死んでくれねえか？プリアレオス」

『グオオオオオオオオ！！！！！！！』

「うっせえ！死んでも、恨むなよッ！！」

そういうと俺は腰に差してある“黒刀”を抜き去り、プリアレオスに切りかかった。

「おらぁ！」

ザシュザシュ！！

すれ違いざまに二度切りつけたが、軽く切りつけた為か、あまり深く切りつけられなかった。

しかしプリアレオスはそれで怒ったらしく、巨大な右手で上から殴りつけてきた。

俺はそれをいったん下がりと避けると、俺に当たらず地面を殴りつけた腕を思いつき切り裂いた。

それによりプリアレオスの右腕は肘から下がなくなり、地面には右腕が転がっている。

辺りは腕から噴出した血が溜まっている。……きも。

俺は未だに痛がっているプリアレオスに近づくと、思いつきり地面を蹴り、飛び上がった。

俺はそのままプリアレオスの左肩に着地すると、首を切り裂いた。

プリアレオスは声の出ない悲鳴を出しながら、死を迎えた。

プリアレオスの死体はそのまま転倒し、首から切り裂かれた頭ははごろごろと転がった。

頭の無くなった首からは血がドバーと噴出し、辺りは血だらけである。

「血出すぎだろ……」

最初は血に慣れなかった俺だが、この世界に何年もいたら流石に慣れはしないが耐性はついた。

しかし流石に出過ぎではないだろうかと思うくらい、血が出ている。

「まあ、いいか。えーっと、ギルドに出す部位はどこだっけ？」

俺はその後プリアleosの体から、ギルドへ提出する部位を剥ぎ取ると、

始めの目的地パーモ村へと歩を進めた……。

続く

第2話 自由 ※挿絵あり（後書き）

書き終わりましたが、ちゃんと出来ているか、心配ではありません。

まあどんどん主人公を強くしていきたいと思いますが・・・・・・。

次回もよろしくお願いします。

外伝 アルミーシュの記録※見た方がいいです（前書き）

外伝ですけどね

お楽しみに

外伝 アルミーシュの記録※見た方がいいです

— — — — — side
アルミーシュ

そういえば皆には言って無かったが、俺が13歳のときフォーリアとの戦争があった。

実はこの戦いのときに、バランドールの王妃フローレイン様が殺害されてしまうんだが、
その時シズナ姫というか、シズナと俺は友達で一緒にいて、偶然近くにいた俺が助けてしまった。

何故俺とシズナが友達かというと、俺が公爵家の養子として入ったとき、

紹介するために城に行ったんだが、その時シズナとあって、年が近いこともあってか、

世話役というか、遊び相手にされてしまった。しかも王様、直々に・
・・・。

ゲームでレナードとシズナが合う場面があるが、その場面に俺が入った感じた。

レナード達と別れてから初めて会ったが、俺の事は覚えてなかった。

意外にショックだぜ……。

シズナはあまりレナードに興味がなさそうだったが、俺にはベツタリだった。

一度一緒にお風呂に入りましょうと迫られたが、何とか逃げ切ったぜ……。

まあ話は戻るが、王妃を助けた俺は王に騎士にならないかと言われたが、

俺は目的があるので、と断らしてもらった。目的が終ったら、騎士になってもいいと言っておいた。

そして俺の勇姿を近くで見てしまったシズナは以前より、ベツタリするようになってしまった。

いままでは兄に接するぐらいの感じだったのに、今では色気というか、そういうのを使ってきた。

多分入れ知恵しているのは王妃だろう。王は流石にこんな事はさせない。

というかそんな王妃も俺を見る眼が怪しくなってきた。

時々ハアハア言ってる時もあった、頬が赤く上気してる気がした。

まさかのシヨタなのかと疑ったが、俺の身長は普通の13歳とは違い173cmぐらいになっている。

なので王妃を超えている。そんな俺は子供には見えないので、シヨタにはならないだろう。

城に時々泊まったりしていたのだが、貞操の危機が迫っていると思うと、眠れなかった。

でも寝てしまつて朝起きると、俺の両側に王妃とシズナがいたときもあった。

そのときは一瞬まさか貞操が……、と思ったが、無事だったので安心した。

まあ王妃を助けれたのはよかったのだが、物語的にはいいのかなと思ったりもした。

だってシズナが暗くならないと、レナードが助けようと思わないかも知れないし……。

まあいいけどね。俺がいることによって原作自体がどう動くかわからないし。

まあその後も俺が旅立つ日までいろんな誘惑があつたが、俺は耐え切った。

というか王妃がいつまでも20代にしか見えないのが、不思議でない。

シズナも年をとるごとに、体が大人っぽくなっていくのできつかった。

ちなみに旅立つとき、爺さんや婆さんしかいないと思つたかもしれないが、

実はシズナもお忍びでだがいらしい……。いや、流石に護衛はいるけどね。

続く

外伝 アルミーシュの記録※見た方がいいです（後書き）

外伝ですから短いです。

第3話 パーモ村

――――――――――sideアルミ
ーシュ

そんなこんなでパーモ村についた俺は、ギルドで依頼達成を報告すると、

昼食を食べるために酒場へとやってきた。

俺は昼食を食べながら、今後の予定を整理することにした。

今回俺がパーモに来たわけは、特にない。

まああるとすれば、此处に連れて来られた筈のユウリを一目見たい、と思ったことと、

後は旅をするんだったら砂漠方面に行く前に、こちらの方面も見に来たかったためである。

それにパーモ村で、馬でも売ってもらおうかなっと思ったからだ。
いや、別に爺さんに頼んでもよかったんだけど、やっぱ一緒に旅するパートナーは自分で選びたかった。

まあ特に良いのがいなかったら、徒歩で旅もいいんだけどね。

俺が今後の事を考えていると、突然酒場のドアが開けられ、村人ら

しき男が慌てた様子で入ってきた。

「た、たいへんだ！ ユウリちゃんが行方不明らしい！」

「!?!?!?!?!?」

酒場の皆が驚いたようだが、酒場のマスターがいち早く質問した。

「どこに行ったか、わかんねえのか!？」

「きこりのアリアンによると、東の出入り口の近くで、ユウリちゃんらしき子を見たらしい！」

それを聞いた皆は一箇所に集まると、話し合いをし始めた。

「…誰が行く」「しかし、モンスターが…」とか、聞こえてくるが、仕方がないだろう。

俺のようなクエストを受けたりする戦士達は戦えるが、ただの村人達に戦う力はない。

パーモにも戦士はいるだろうが、それでも少数しかないだろうし……。

にしても誘拐ではないだろうし、自分で行ったとすれば、どんだけ

行動力あんだよ…。

ユウリは10歳ぐらいだろうし、外が危険かぐらいわかるだろう。一体何をしにいったんだろうか……。

ま、いっか。とりあえず、助けに行くか！愛しの義妹のために！

「よお！おっさん達。ちょっといいか？」

「なんだね？青年。ワシ達はいま忙しいんだが…」

「いや。少し気になる事が聞こえたんでな。少女が行方不明だとか…」

「そうだが…。君には関係ないだろう」

「まあ。関係ないかもしれないが、俺も手伝おうとおもってな。これでも腕には自信あんだぜ！」

「おお！！それはありがたい！少し人数が少なくなっとな。是非手伝ってくれ！」

「まかせな！」

俺はそう言う準備を終らせ、先に行く事を伝えると、東門からブラスタ平原へと向かった。

[illegible]

「手伝うといったが、何処にいるのか……」

正直何処にいるかなんて、俺にもわからない。
ここは根気よく隅々まで探さなければならぬ。
といっても10歳の少女がそんな遠くまでいけるとは思えない……。
とりあえず俺はユウリを探すため、ブラスタ平原を歩き出した。

――――3時間後

「……はあ。モンスター、超うぜえ……」

正直モンスターがいすぎて、ユウリを探すのに集中できない。

ポルカ族、バケット族は攻撃をしなければ、襲ってくることは無いのでいいのだが、

ジャイアントビーは近くによると、襲ってくるので鬱陶しい。しかも数が多いのだ。

それにトロルやトレントになると、凶体が大きいので、倒すのに時間がかかってくる。

別に負ける心配は無いが、此処までモンスターが多いと面倒になってくる。

しかも時間がかかってる所為で、太陽が沈みそうになっている。

これは早くしないと、夜になりモンスターが凶暴化してしまう。

そうなってくるとユウリの危険が大きくなってくる。早く見つけないと危ない……。

「やばいな……」

俺はユウリを早く見つけるため、危険を最小限に抑えるために、ブラスタ平原を駆け出した。

俺がブラスタ平原を走っていると、不意に女の子の声が聞こえた。

— — — — — . . . き . . . きゃ . . . 誰か . . .

「……………なんだ？」

同時にズシンッ、ズシンッと、まるで大型モンスターが歩いているような……。

「!?! まさか……………」

私には5、6歳から前の記憶が無く、そしてその頃に今の家に引き取られました。

といってもお義父さんもお義母さんも、そんな私を本当の娘のように育ててくれます。

私もそんなお義父さん達のことが大好きです。

記憶もいつか思い出せたらなあ、と思うときもあるけれど、思い出せないなら別にいいかなとも思います。

そんな風に暮らしていたんですが、実は先日突然お義母さんが倒れてしまいました。

死ぬ可能性は今のところ無いようですが、このまま放っておくと、死んでしまうかもしれないんです。

いまお義父さんがバランダーにお医者さんを呼びに行ってるそうですが、

家には高いお金もありませんし、そんな余裕はありません。別に貧乏でもないんですが、裕福というわけでもありません。

私も何か出来ることがないかと、色々調べていると、

なんとブラスタ平原の奥に“病によく効く花”があるそうなんです。私は何とかそれを取りに行きたいんですが、村の皆が許可してくれるはずがありません。

なので私は皆にばれないように、村の外へと出ることにしました。

私に身に危険が降りかからずとも知らずに……。

そして村を出て4時間、やっとの事で凶鑑に載っていた花を見つけることが出来ました。

私は花を鞆にしまうと、村を目指し歩き出しました。

しかしすでに空は赤くなり、もう1時間もすれば暗くなることは確実。

その時私は父がよく言っていた言葉を思い出しました。

『ユウリ』

『なに？ お義父さん』

『絶対に村の外へ一人で出てはいけないよ』

『ええ、なんで？』

『外にはね、凶暴なモンスター達がいる。

それに暗くなるとモンスター達はより凶暴化して、人をよく襲うようになる』

『うん！わかった！』

『そうか』

この時初めて自分が危険のど真ん中にいることに、気付きました。

「……ああ……うう……」

私は恐怖で押しつぶされそうになりました。

体は震え、足はすくみ、動こうにも動けません。今にも腰が抜けそうで、涙が出そうになります。

しかし私は勇気を振り絞り、村に向かって歩き出しました。

何とか日が暮れる前に帰る事が出来れば、それだけを心に歩きつづ

けました。

しばらく歩いてると私の耳にズシンッ、ズシンッと音が聞こえます。音だけではありません。なぜか体が震えるほど、大地が揺れています。

次第に音が大きくなってきて、私が後ろを振り向くと巨人がいました。

私はあまりの大きさに唾然としてしまいました。

すぐに気が付くと私は駆け出しました。それに自然と口から助けを呼ぶ声を出していました。

普段こんなところを人が通ることはありません。

ですが期待をするしか私に助かる希望が無かったのです。

しかし巨人は、そんな希望を踏み潰すかのように、私に迫ってくるのです。

私は叫びました。声が枯れるんじゃないかと思うほど、叫びました。

しかしその努力も空しく、私のすぐ背後へと巨人は迫ってきました。私は焦りすぎたのでしょうか、足が絡まってしまい地面へと倒れてしまいました。

そんな私に巨人はおもちゃを壊すように、右手に持った大きな棍棒を振り落としてきました。

私は迫る恐怖に目を閉ざし、私は叫びました。

— — — — — ・ ・ ・ ・ ・ 誰か助けて！！！！！！！

その願いがかなったのでしよう。
くる筈の痛みがなく、聞こえたのは巨人の苦しそうな声と、男の声
でした。

「大丈夫か？お嬢ちゃん……」

私が目を開けると、そこには輝く夕日をバックに、若い男の人が刀
を右手に立ってました。

長身で、鋭いながらも優しさを持った目、風になびく後ろ髪が、そ
の人の魅力を引き立ててます。

私はこの時すでに、この人の魅力に惹きつけられたのでしよう。

私の頬が上気し、赤くなっていくのがわかりました。目もうつとり

——————————————Sideアルミ
ーシュ

いやあゝゝゝ。間一髪だった。

あの時棍棒を持ってる腕を切り落とさなかったら、ユウリはぺしゃんこだったぜ。

倒した後、ユウリのところに行ったけど、なんか返事が曖昧だったし、

頬が赤くなってる、記憶を失う前と一緒に見えたが気にしないでおう……。

あの後ユウリと俺は無事、パーモ村に帰れた。

帰る途中なんで外に出たか聞いたが、なんとも感動する話でつい涙ぐんじまった。

帰りのモンスターも俺が返り血を浴びてるせいか、近寄ってこなかったし。

多分あのモンスターはこの辺の主だったのかな？まあいいけど……。

帰ったときユウリの父親っぽい人が駆け寄ってきて、ユウリに抱きついてた。

母親は倒れてるっぽいから、此处にはこれないだろうし、きっと心配してるだろう。

その後父親が俺のほうにお礼を言いに来た。そのあと何か恩を返したいと言ってきた。

俺は別に親切心でやったわけだし、勝手にしたことなので、お礼は

いらなないっておいだ。

しつこく言ってきたので、今日あんだの家に泊めてくれと言っておいた。

不満そうだったが、それならお安い御用だといって、ユウリの家へと向かった。

家に着くと母親っぽい人がいたが、やつれていて今にも倒れそうだった。

話を聞くと、父親が医者を国に探しに行ったらしいが、上級な医者はフォーリアとの戦争で、いまは戦場に行ってしまったらしい。

その時ユウリが行方不明という事を、村から来た仲間に伝えられ、急いで帰ってきたらしい。

うゝむ。まさかユウリの母親が病気だとは……。

ま！俺が治せばいいんですけどね！医学習ってるし。

「俺が治しましょうか？」

「え！？治せるんですか！」

「ああ。一応医学は大体習ってるし、神聖魔法も使えるしな」

「ありがとうございます！で、ですがお金のほうが……」

「そんなもんいらねえよ。別にお金には困ってねえしな」

「しかし……」

「じゃあ。明日も夕食を食べさせてくれ。それをご馳走な！」

「……わかりました！明日は豪華にいきましょう」

「わーい！明日はご馳走だ〜！」

俺たちは顔を合わせると笑いあった。

その後俺は夕食を食べた後、ユウリの母親の治療を始めた。

3時間後治療は無事成功。病気を完全に治すための薬を2ヵ月分作り、父親に渡しておいた。

俺はその後、1週間ほどパーモ村に滞在し、パーモを出ることにした。

その時、いい馬を一頭ユウリのお礼だと言われて貰った。

パーモを出ると言った時のユウリの顔ときたら、悲しみに満ちていた。

俺はユウリの頭を撫でながら、いつかまた会いにくる事を誓い、パーモ村を後にした。

続く

第3話 パーモ村（後書き）

結構いい感じに書けたと思います。

まあ最終的にユウリは落ちました。

まあ主人公ですからね。女は落ちてしまおうでしょう。

とにかく次回もよろしく。

第4話 アルバナへの道のり

— — — — — side
アルミーシュア

パーモを後にした俺は一度バランドールへ戻ると、
次の目的地のアルバナを目指し、クレイドール平原を歩いていた。

アルバナはバランドール王国の南東に広がるラグニツシュ砂漠にある街で、
二足歩行するカエルに似た種族・ガーマンが多く暮らし、交易都市として栄えている。
街の実権はドン・ガマローネが握っており、何をするにも彼の許可が必要である。

ドン・ガマローネは、他のガーマンよりも巨体で種族が微妙に異なる

るらしい。

レベルファイブお馴染みのアイテム合成役でもある。

今回の目的もガマローネの営む合成屋を利用するために、恩を売っておこうと思ったからだ。

後はカーラがいるなら会っておこうと思う。多分いると思うが、いないならそれでいい。

アルバナに行くためには、クレイドール平原、ノルディア坑道を抜け、砂漠も通らなければならぬ。

今から考えるだけでも、俺のやる気駄々下がりだ。

クレイドール平原は結構広いので、抜けるのに時間がかかる。

なので休むためにノルディア坑道の手前でキャンプを張ろうと思う。

クレイドール平原にはブラスタ平原にもいたポルカ族、バケット族、ジャイアントビー、

トロル、トレントのほか、デスフラワーとワイルドボアがいる。

デスフラワーはでっかい食人花で、ワイルドボアは熊みたいなやつだ。

別にこいつらぐらいなら、負ける心配はまったく無い。
しかしクレイドール平原にはヌシがいる。

それはビッグマウスというでつかいネズミみたいな生物で、正直キモイ。

目が毛がありすぎて見えてないし、何より大きすぎだと思う。

大きさは多分10〜15mぐらいあるんじゃないかと思う。実際にはもうちょっと小さいかな？

まあ大きいことには変わらないがな。え？何でそんなことがわかるんだって？

そりゃあ、目の前にいるしね。なんか最近、考え中にモンスターが出てくるのが多い気がする。

『ブオオオオオオオン！！！！』

「はぁ…。ダリイな、おい。さっさと潰されろや。でかネズミ…」

その言葉を理解をしたかはわからないが、ビッグマウスはこちらへと突進してきた。

俺は右に飛び退くことによりそれを回避、ビックマウスはそのまま、後ろにあった大岩を破壊した。

「ひゅー。おっそろしいー。そんでもって…死ね」

俺は地面を蹴り、飛び上がると、ビッグマウスの頭に着地すると、そのまま刀を脳天にぶっ刺した。

ビックマウスはギャオーと一鳴きすると、そのまま倒れた。どうやら死んだようだ。

生物なんだから、脳を潰せば一瞬で勝負がつく。まあ普通はそんな隙が無いが…。

「まあ死体は、他のモンスターが処理してくれるだろう…」

現に周りの森の中にはいろんな気配が漂っている。

俺も此処に何時までも居る訳には行かないので、先に進むことにした。

「（次のヌシって、どうなんだろう？まあ、どうにかなるか…）」

というか荷物を持たせないと、馬がうるうるした目で見つめてくるのだ。

多分自分が役に立ってないと思ったんだろう。可愛らしい奴だ。

ちなみにこの馬はメスで、名前は“マリー”にした。意味は特にな
い。

マリーはメスだが、体が普通の馬より大きく、力強いお馬さんだ。
頼もしいことである。

俺は朝食を終えると、テントを折りたたみ、出発する準備をすすめ
た。

ちなみにこのテント、結構なお値打ちもので、布団に魔力を溜める
と膨らんで、

なかなかフワフワ度をだし、安らかな眠りにはいる事が出来る。

テントの中も結構広く、多分4、5人ぐらいなら入ることが出来そ
うだ。

こんな物、公爵家である爺さんぐらいしか用意できんものだろう。

まあ快適な旅が出来るので、俺としては結構なことである。さすが
爺さん…。

「…ま、いいか。マリー！そろそろ行くぞ！」

Year	1990	1991	1992	1993	1994	1995	1996	1997	1998	1999	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019	2020	2021	2022	2023	2024	2025	2026	2027	2028	2029	2030	2031	2032	2033	2034	2035	2036	2037	2038	2039	2040	2041	2042	2043	2044	2045	2046	2047	2048	2049	2050	2051	2052	2053	2054	2055	2056	2057	2058	2059	2060	2061	2062	2063	2064	2065	2066	2067	2068	2069	2070	2071	2072	2073	2074	2075	2076	2077	2078	2079	2080	2081	2082	2083	2084	2085	2086	2087	2088	2089	2090	2091	2092	2093	2094	2095	2096	2097	2098	2099
1990	1991	1992	1993	1994	1995	1996	1997	1998	1999	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019	2020	2021	2022	2023	2024	2025	2026	2027	2028	2029	2030	2031	2032	2033	2034	2035	2036	2037	2038	2039	2040	2041	2042	2043	2044	2045	2046	2047	2048	2049	2050	2051	2052	2053	2054	2055	2056	2057	2058	2059	2060	2061	2062	2063	2064	2065	2066	2067	2068	2069	2070	2071	2072	2073	2074	2075	2076	2077	2078	2079	2080	2081	2082	2083	2084	2085	2086	2087	2088	2089	2090	2091	2092	2093	2094	2095	2096	2097	2098	2099	

ファイヤーエレメントは物理耐性が強いので、水属性の魔法や技を習得しておく倒しやすい。

まあ俺は毒消し草を持ってるし、神聖魔法のキュアポイズンも覚えてる。

これで負ける方がむずかしいだろう。

モンスターの特徴はミズコグモが名前のとおり蜘蛛、しかし色が青。バジリスクはトカゲみたいなので、あまり大きくは無い。小さくも無いが…。

ファイヤーエレメントは魔法を使うモンスターで、名前のとおり火属性である。

まあこんな感じなんだが、普通に力押しでも負けることは無い。

この辺にはあまり来たことは無いが、大丈夫だろう。

一応この辺には鉾石などがあつたりするので、探しながら進もうと思う。

3時間後

「やっと出れた」

え？途中経過がない？いいんだよ、そんなもん。

というか坑道内にあまり特徴がないから、説明するものが無い。まあいいじゃねえか。俺だって暇だったんだぜ？

敵倒したり、敵倒したり、敵倒したり……。まあ結局、敵しか倒してないんだよ。

でっかい蜘蛛なんか、見ただけで鳥肌が立ったわ。きもちわるい……。。

鉱石なんて、あまり無いしな。まあ取りあえず砂漠に出たことだし、ローブでも着るか。

だって日差しが痛いし。暑いんじゃないくて、痛い。ここ重要だ。テストに出るぞ。

「まあどっちみち、暑いけどな……」

はあく。はやくアルバナについて、休みたい。

その前に今日はもう日が暮れるので、キャンプを張って休むことにした。

ちようど湖があったのでよかった。水は綺麗で飲めそうくらいだ。まあ、すでに飲んだけど……。

「マジ生き返るわく。水は大切にしないと……」

此処からはマジで命に危険が降りかかる。

敵は倒せるが、この暑さの中では、すぐに体の水分がなくなる。

熱中症で倒れて、モンスターに襲われたら最悪だ。こまめに水分補

給しないと…。

「まあ、取りあえず寝るか。マリー、お休み：ZZZ」

ぶるるるん。とマリーの返事を聞くと、俺は布団の中で眠りについた。

ちなみに言ってなかったが、このテントの中は魔法によって一定の温度に保たれている。

すごく快適なテントで、俺は疲れていたのかすぐにぐっすりと寝てしまった。

続く

第4話 アルバナへの道のり（後書き）

もうすぐでアルバナにつきます。

まだストーリーは考えていませんが、お楽しみに。

では、また次回お会いしましょう。

第5話 交易都市アルバナ ※挿絵あり

――――――――――sideアルミー
シュ

前回より二日後の夜。

俺はようやくアルバナへと、たどり着いた。

この二日だが、いままでの旅で、最も過酷だったかもしれない。

昼は暑い日差しの中を歩き、襲ってきたモンスターを撃退。

夜は気温が一気に下がり、ものすごく寒くなる。温度差が激しい分、肌寒さが突き刺さった。

昼間なんか汗が滝のように出てくるし、モンスターに立て続けに襲われて、まさに地獄だった。

しかしそんな地獄とも、今日でおさらば。

俺はアルバナにつくと、真っ先に宿に行き、思いっきり寝た。

快適なテントがあっても、いつモンスターに襲われるかわかったもんじゃない。

気が抜けないので、おちおち寝られないのだ。寝ていても気配を感じたら起きれるように修行したけど…。

次の日、昼まで爆睡した俺は、昼食と情報収集を兼ね、酒場まで行くことにした。

行くところは、ゲームでカーラが踊っていた所だ。

カーラが何処に引き取られているか知らないが、酒場で聞けば、少しは情報も集まるだろう。

取りあえず俺は腰に刀を差し込むと、荷物を宿に置き、マリーに餌をやる事を宿の親父に頼むと、酒場を目指し歩を進めた。

まあ、酒場に來たわけだが……。

酒場に入ってきた俺をじっと見てくるが、それを無視すると、開いてるカウンターに座った。

「おすすめで」

16歳は青年なのか、少年なのか微妙な年だな…。どっちでもいいけど。

「よおう、あんちゃん。俺たちにも、おごってくれよ…」

「ついでお小遣いも、ほしいなあ。あんちゃん…」

「素直に出した方が、身のためだぜえ」

雑魚が…………。

周りの連中は「あいつも終わったな…」とか、「いけ！いけ！やっちまえ！」と言う奴がいるが、

こいつらの中に俺の力量を測れる奴はいなかったようだ…。

「何とかいえよ！くそ坊主！」

黙っていたせいか、無視されたと思ったらしい。

後ろの一人が俺の肩に触れようとしたが、

触れる直前そいつはぶっ飛ぶと、酒場の壁へと叩きつけられた。

ゴガァン！！

「ぐがぁ！！」

ひゅううん……ドオン！！！！……ずるずる。

「「！！！！！！！！」」

「俺に気安く触れるな。屑が……」

「！？て、てめえら、やっちゃまえ！！！！」

俺がチンピラの一人をぶっ飛ばすと、そいつの仲間かは知らないが、何人かのチンピラが俺に襲い掛かってきた。

しかし全員腰が引けていて、勝負にならない。

そりゃあ、殴っただけで10メートルぐらい飛んだら、誰でもびびるだろう。

その後俺はチンピラ達を、ちぎっては投げ、ちぎっては投げと続けていたら、

何時の間にかチンピラが全滅していた。ここまで雑魚だったとは、情けない……。

にしても暴れてしまった所為か、店の中がめちゃくちゃだ。

「店んなか、弁償か？」

「こっちも慣れてるさ。こいつらに弁償させるよ」

親父はそう言いながら、地に倒れているチンピラ達を指差した。

「そうか……。ご愁傷さま、屑たちよ……」

俺はそう言いながら、手を合わせ、黙祷した。

あなた達の事は、一生忘れ……ます！ どうでも、いいしね！

とりあえず俺は、此処ではもう情報収集できないので、勘定を済ませると、この店を出ることにした。

[illegible]

店を出た俺はとりあえず街を、歩き回ってみることにした。

なにか新たな発見が出来るかもしれないし、一度この街を見て回ったかった。

改めて見てみると、この街にはいろんな人種の商人や戦士達がいた。このアルバナは交易都市として栄えているので、人が集まりやすい。特にこの街にはガーマンが多く、いろんな武器や道具が並んでいる。ガマローネは武器を多く取り扱っているので、特に武器の種類はほかより多かった。

いまのところ道具は足りているし、武器もあるので特に見るものは無いが、
こういうところは、いろんな物が集まるので、見ていだけでも楽しい。

俺は店が並んでいるところを抜け、スラム街に入ることにした。

スラム街には、さっき店にいたチンピラのような奴らが多く、俺が歩いていると、こちらを向くが、殆どの奴が興味を無くすと視線を戻した。

俺がどんどん奥に進んでいくと、建物の角から声が聞こえた。

俺は気になったので、顔を少し出し、覗いてみると3人の男たちが女の子を囲んでいた。

なにやら女の子が男達に突っかかられているようだが、これはどうしたものか…。

あまり面倒ごとに首を突っ込むべきではないが、女の子が困っているようなので、

ここは男として、助けるという選択肢しかないだろう。まあ、もともと助ける予定だったが…。

俺は角から飛び出ると、男達の中の1人を目指し走り出し、その勢いのままドロップキックをかました。

ボガァン！！！！！

「ぐふうっ！！」

ドロップキックを食らった男は、衝撃によりふっ飛んでいき、建物のちょうど窓のところに突っ込み、その建物の中に入ってしまった。

建物の中からはガシャン！やドゴォン！といろんな物が壊れた音がしたが、気にしないことにした。

「てめえ！よくもマーくんを！」

「そうだ！よくも人の家壊しやがって！弁償しやがれ！」

「「てめえの所為だよ！！！！（ビシッ！）」」

男達につっこまれてしまった。

「……おめえら！女の子をなに囲んでんだ！」

「うおい！なにスルーしてんだよ！お前の所為だよ！なに無視してんの！？」

「現実みろや！」

「お前がみろよ！」

……やれやれ。

「ふう……。これだから負け犬は困る……」

「別にまだ負けてねえし、お前何様だよ！？」

「俺様だ！！！」

「あんたはバカか！！」

……冗談だけどね。ここまでツツコミがあると、ボケたくなるじゃん。

「…と、まあ冗談は此処までにしておいて…」

「冗談かよ!?!」

「おたくら、なにしてんの? 女の子囲んで。まさか口〇? お前ら、
〇りなのか?」

俺はそう言いながら、少し後ろに下がった。

「何だよ! 変態じゃねえよ! …こいつが金を持っていたんだ。
少しばかり、俺たちに募金してもらってたんだよ」

男はそう言うのとニヤリと笑った。

スラムにはこういう連中しかいないのか、それともこいつ等が屑な
のか。

まあこのご時世、こういう事しないと生きていけねえのかねえ。
まともに働けよ。

「……まあ、どっちみち最低だけだな」

「そんなもん知らねえなあ…。このスラムの奴らがまともに働け

るかよ」

「お前らの事情はしらねえが、お前らにはぶっ飛んでもらおう」

「…なに？」

俺はそう言うと、少し離れていた奴に近づくと、奴の鳩尾に右拳を叩き込んだ。

「ぐうう！（…バタリ）」

「なに！？何時の間に！？」

「気にすんな。どうせ聞いたところで……」

一一一一一お前らが気付くことはできない……。

男は最後まで聞くことなく、俺の膝を腹に受け、地に伏せた。

この癖はいずれ直しておかないと…。直らないと思うけど。

「すまん。考えごとがあつてな。すまんかった」

「そんなことはいいが、なんで私を助けた。別にあんたに助けて欲しいといった覚えは無いよ」

「まあ、言っていないが、女の子が困っていれば助けるのが男っていうもんだ」

「…ふん。気障な男は嫌いだよ」

「ありゃ？嫌われちゃったか？」

「でも…その…」

「ん？」

「…あ…ありがと…な…／／／／／」

「……………くくくくく…」

「？」

「…ははははは！…！」

「な、なにがおかしい／＼／＼／」

「…いや、別におかしくは無いが…（まさかのツンデレ……乙！）
あまりに可愛らしくてな。

気が強そうだったから、まさかお礼を言うとは思わなかったよ…。
くくく…」

「う、うるさい」

「まあ笑ってすまなかったな。可愛いお嬢ちゃん」

「／／／／／／／／」

「そういえば名前なんて言うんだ。俺はアルミーシュって言うんだ。
なんて呼んでもいいぜ」

「……ラ…」

「ん？」

「……カーラ。カーラだよ、私の名前。」

「……………まじ？」

「そうだよ」

「（気付かんかった…。でも確かによく見れば、カーラにしか見えないような…。」

成長すると、気付かないようになるな。流石にシーザーは気付くと思うが…）」

「どうしたんだい？」

「いや。いい名前だと思ってな」

「べ、別に誉められても、嬉しくなんてないよ／＼／＼／」

「（かわいい…）ところで親御さんはいるのか？」

「……二年前に死んだ。この辺の風土病でね」

「……そうか。それはすまなかった」

「別にいいよ。もう慣れてる」

それにしてもカーラがスラム街にいるのはおかしいと思ったが、そんな理由か…。

流石にミディアスがスラムのど真ん中においていくわけないし、まさか死ぬとは思わんだろ。

「いまは何処に住んでるんだ？ スラム街か？」

「いや。いまは広場の酒場の住み込みでお手伝いをして、ついでに踊り子の練習もしてる。

此処にいまいるのは、此処を通って行く方が速かったからさ」

「…そうなのか。でもここを通るのは絡まれるから、危ないぞ。やめとけよ」

「わかってるよ」

「わかればいいが…」

それにしてもここにカーラを置いとくには危険すぎる。

こんな女の子をここに置いとけば、いつか今日みたいにおそわれちまうしな…。

どうしたもんかねえ…。……あ。そうか。連れてけばいいじゃん。一緒に。

「なあ。カーラ」

「なんだい？」

「俺と一緒にいかねーか」

「は？なに言ってるんだい」

「だから、一緒にいかねーかって、言ってるの。俺旅してるし。どうだ？」

「どうだって言われても…、いいのかい？邪魔になるよ。まだ小さ

いから、モンスターと戦えないし」

「別に戦って欲しいとは思ってないさ。さあ、どうする？カーラ。行くか、行かないか」

「……………」

「さあさあさあ！！」

「……………行く。一緒に行くよ。ここにいても、何も面白くないしね」

「そうか！一緒にくるか！よーっし、このこの！」

「ちょ！頭を撫でるんじゃないよ！ちょ、やめ…ふにゃ」

すでに俺の頭撫でレベルはマックスだ。

すべてのツンデレを解きほぐしてしまおう…。（笑）

まあ、そんな設定ないがな！…でも頭を撫でるのがうまいのは本当です。

「ふにゃ〜……っは！私は一体なにを！」

どうやら気付いたようだ。俺はカーラの頭から手を離すと話しかけた。

「とりあえず明日酒場に行って、旅に出る事を伝えにいこう」

「わかった」

「よし！今日はもう遅いし、宿に戻るがカーラはどうする？」

「う〜ん…旅の事聞きたいし、そっちに行く事にするよ。当然酒場に伝えてからだけど…」

「決まったら、早速行くか！」

俺たちは酒場によって俺が泊まっている宿に泊まる事を伝えた後、宿に向かった。

宿で飯を食べた後、部屋に戻ると、その日は夜遅くまで旅についての話をした。

続く

第5話 交易都市アルバナ ※挿絵あり（後書き）

結構長かった・・・。

しかし書いていたらカラーがなぜかついてくる事に！！

作者もなぜか流れで書いてしまった。

でも後悔もしてないし、反省もしてません。

次回もお楽しみに！

第6話 ガマローネのプレゼント（前書き）

今回はガマローネへの恩を売る話…。

では、どうぞ……。

第6話 ガマローネのプレゼント

— — — — — side
アルミーシュ

カーラと出会った日より、二日後。

俺は、アルバナを支配するガマローネの屋敷へと向かっていた。

この二日間はカーラの身を預かることになるので、酒屋の親父に話をつけたり、

カーラが使うことになる服や道具、武器や防具を調達していた。

服や道具などはその辺の店で買ったが、武器などは体が小さいので、特注にすることにした。

特注なので作る時間がかかる。6日はかかるそうだ。

なので俺はその間、ガマローネに安く合成を利用できるようにするため、恩をうることにした。

原作ではガマローネの手紙を、浮気相手のイボンヌに届けることで恩を売って、合成を安くしてもらっていた。

あの時期より7年くらい前だが、今でも浮気している可能性がある

はず…。

別に無くとも他に困っていることがあれば、それを助けて恩を売っておこうと思う。

俺が考えている間に、屋敷前に着いたようだ。ちなみにカーラは宿でお留守番だ。

すると前方の方で二人というか、二匹のガーマンがなにやら話合っていた。

俺の予想では、あれはレナード達に手紙の依頼をしたガーマンであったと思う。

確か名前は…ペドロとパドロだったような…。まあ、どうでもいいか。

とにかくなにやら困っているようだ。話し掛けてみよう。

「どうしたんだ？ おまえら」

「ああ。旅のものか…。いや、なんでもない。気にしないでくれ」

「まあ、そう言うなって！ 困ってんだろ？」

「まあ、そうだが…」

俺がペドロ（たぶん…）と話していると、パドロが話しかけてきた。

「ちょっと待て、ペドロ。こいつにあの件を任せればいいんじゃないか？」

「そうか？少し待っておいでくれ…」

そう言うと二匹は、少し離れた場所にいった。

「いや、しかしだな…（ゴニヨゴニヨ…）」

「見てみる。こいつは見た感じ、強そうではないか…（ゴニヨゴニヨ…）」

ペドロ、パドロはすこし離れると、ゴニヨゴニヨと相談し始めた。原作でもあったシーンだが、けっこう面白い。そんな事を考えていると、どうやら話し合いは決まったようだ

「決まったのか？」

「ああ。実はガマローネ様にはある悩みがあるのだが…」

「悩み？」

「実はガマローネ様には恋人であるアマンダ様がいらっしゃるのだが、

最近になってとうとう結婚をしたくなったらしい…」

「じゃあ、プロポーズすればいいじゃないか」

「いや実はプロポーズをしたいらしいのだが、それと一緒にプレゼントを贈りたいらしい。

そこでだ、そのプレゼントとなる素材を取ってきてもらいたい」

「その素材ってのは何なんだ？それに場所は？」

「それがその素材のある場所というのが、ラグニッシュ砂漠でも、最も過酷の地である“マカラス砂丘”にあるというのだ」

「マカラス砂丘？何処だそこ…」

「アルバナの南のオアシスの向こう側にある。そこで取れる“マカラス鉱石”を取ってきてくれ」

そんなとこ聞いたこと無いぞ…。まあ、これを受けないと恩を売れ

ないしな。

「わかった。そこで提案なんだが…」

「ん？なんだ？」

そこで俺はペドロ、パドロに例の件を頼んでみることにした。
俺が頼んでみると、ペドロがガマローネに返事を聞いてもらった。
れた。

「取ってきてくれた場合は、合成を安くしてやると、ガマローネ様
はおっしゃられた」

「そうか！サンキュー！じゃ俺は行ってくるわ」

「なるべく早く取って来てくれ！」

「ああ！わかった！」

俺はそう言っているとカーラにこの事を伝えるべく、ペドロ達と別れ、宿
へと向かった…。

「実はマカラス砂丘には、あるモンスターがいてそれが起きる時期ってというのが今なんだ。

そのモンスターは“ドドリアス”という土竜なんだが、そいつは起きると餌を探すとき、

砂嵐を起こすんだ。しかも砂が飛んでるんじゃないくて、拳ぐらいの石を飛ばすんだ。

その中心にドドリアスはいるんだが、討伐しようにも中心まで辿り着けないし、

そこを通るアルバナの戦士や商人も困ってて、迷惑なモンスターなんだ」

「それは面倒だな…」

「面倒で済ませるほど、弱くは無いぞ…」

そんな奴がいるとは、予想しなかったぞ…。
先も急ぎたいし、どうやって行こうかな…。

「そいつを避けてマカラス鉱石は取れないのか？」

「実はドドリアスは鉱石を餌にっていて、砂嵐は砂の深い場所にある鉱石などを取るためなんだ。

マカラス鉱石は深いところにあって、ドドリアスが起きているときしか取れないんだ」

「そうか…」

そういうことならやるしかないか…。

まあ、たぶん勝てないことも無いと思うし、とにかく行って見たらわかるだろう。

「とにかく明日、いや明後日に行ってみて、一目見てから決めようか。」

まあ、勝てると思うがな…。負けるようだったら、帰ってくるし…。」

「そうだね。それがいいと思うよ」

「というかカーラも来るのか？」

「行っちゃ駄目なのか？」

「まあ来てもいいが、危険だったらすぐに逃げるか、どこかに隠れるかしらよ。危ないし…。」

「心配もいいが、負けるんじゃないよ。アル兄い」

「あるにいい？それって俺の名前か？」

「べ、別になんて呼んでも、私の勝手だろ／＼／＼／」

「別にいいけど…」

記憶なくす前はアルお兄様だったから、アル兄は新鮮だなあ。まあどっちでもいいけどね。カーラが呼んでくれるなら…。

「まあ明日は準備をして、明後日に出発するでしょう」

「…うん／＼／」

カーラは未だに赤かった。

そんなに恥ずかしがらなくてもいいのに…。

／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／

出発当日。

昨日カーラの特注の武具はまだ出来ていないので、普通の武具を買いに行った。

カーラの武器は片手剣でエストックという剣だ。

それ以上の剣はカーラにはまだ扱いにくいので、その剣にすることにした。

剣以外にも、蛮勇の大盾という盾に、他の防具はライトシリーズにした。

盾は体を守るために大きい盾にした。防具は重くも無く、そして軽くも無い物にした。

準備を終えた俺たちは南門からアルバナを出ると、まずはマカラス砂丘の手前にあるというオアシスを目指し、歩き始めた…。

「…にしても、暑い…」

「言うな。余計に暑く感じてしまう」

「しょうがないだろ。暑いんだから」

「とにかく歩こう。アル兄い」

「…そうだな」

俺たちはオアシスを目指すわけだが、目の前には崖というか大きな段差があるので迂回しなければならない。

飛び降りてもいけるかもしれないが、多分いまの俺の身体能力では、怪我をすると思うのでやめた。

仕方ないので俺たちはまず迂回をして、オアシスを目指すことにした。

ラグニッシュ砂漠にはキラビー、ワイルドボア、ファイヤーエレメントのほかに、

サイクロプス、スコピオン、メガロティグリス、ジャツカル、ゴームなどがある。

サイクロプス、メガロティグリス、ゴームの個体数はまだ多くは無いが、

その他のモンスターは結構な数があるので、面倒な感じだ。

それに砂漠は昼と夜の気温の差が激しいので、戦闘をする場合、気を付けなければならない。

今回はカーラもいるので、あまり急がず、慎重にいく予定だ。

あまり無理をするとカーラが怪我をする可能性があるし、心配もあるだろう。

ガキイイイン!!!

「…っと！考えすぎたか！」

そんな俺は戦闘中。

考えすぎると他の事が見えなくなるのは要注意だ。

まあ見えなくても油断はしてないので、体が勝手に動いてるけど…。

ザシユ!!

「…これで終わりか」

どうやら全て殲滅したようだ。

「お疲れ様。アル兄い」

「ああ。カーラもな」

一応弱そうな敵はカーラも一緒に戦わせてる。

それじゃないと何時までも経験が上がないし、戦う能力が上がないからだ。

カーラは騎士の契約者だし、いろいろ困難もあると思うので、びし
ばし鍛えていこうと思う。

そういえばカーラの騎士は何処にあるのだろう…。まあ適当に探すか…。

多分ドグマホールの神殿のどこにあると思うし、探せば見つかるだろう。

「よし。先を急ごう」

「わかつた」

俺たちは少しでも早くオアシスに辿り着くよう、足を進めた。

[illegible]

2日後。

俺たちはやっとオアシスへと辿り着いた。

ここまで辿り着くまでに倒したモンスターは数え切れない。

繁殖期なのかもものすごい数のモンスターがいた。

しかしそのおかげでカーラの戦闘能力もあがり、俺もカーラとのコンビネーションを鍛えれた。

モンスターからは色々素材が剥ぎ取れるので、鞆の中に詰め込んでおいた。

今日は明日のドドリアス戦のため、休憩をすることにした。

俺が湖の近くにテントを張っていると、カーラが料理を始めた。

カーラは意外にも料理がうまい。美味だ。

カーラの話によると、両親が死んでからは一人で暮らしていたため、自分で料理をするしかなかったという…。俺は不憫に思ったので、頭を撫でておいた。

するとカーラは顔を赤くし、殴ってきた。しかも鳩尾だ。世界を狙えるようなストレートだった。

まあとにかく料理がうまいのだ。

俺たちが料理を食べ終わると、カーラは湖に水浴びしに行った。

カーラがあと6、7年歳をとっていたならば、覗きにいくのだが、流石に小学生ほどの少女の裸に興奮はしない。

というか俺が水浴びしにいくと、逆に覗かれた気がした。見てはいないが、気配がした…。

俺たちはその後、テントに入ると睡眠をとることにした。
ちなみにカーラは俺と一緒に布団だ。一緒に寝ないと寂しいらしい。
俺はカーラの体温を感じながら、眠りへとついた。

続く

第6話 ガマローネのプレゼント（後書き）

長くなりそうなので今回はここまで・・・。

次回もお楽しみに！

第7話 土竜“ドドリアス” ※挿絵あり

— — — — — side
アルミーシュ

次の日。

朝食を食べ、準備を終えた俺たちは、早速マカラス砂丘を目指し出発することにした。

昨日、ドドリアスに対しての作戦を考えたが、あまりいい案は出なかった。

そもそも、そんなに簡単に案が出るなら、とっくの昔にドドリアスは倒されているはずだ。

とりあえず俺たちは、ドドリアスを一目見てから作戦を考えることにした。

敵を倒しながら歩くこと3時間…。

とうとうマカラス砂丘についた俺たち。

そこには轟々と暴風が吹き、当たったら頭がはじけ飛びそうな鉱石が空を舞っていた。

「「……………」」

「…で、どうする。カーラ」

「どうするって言ったって…」

俺たちの頭でいくら考えようにも、いい案が出るはずが無かった。

「そういえばさ、鉱石がその辺に落ちてるし、それを取ればいいんじゃないか？」

「鉱石を取ろうとすれば、ドドリ阿斯が感知して、襲ってくるんだ」

「そうなのか？じゃあ、倒せばいいじゃないか」

「倒そうにも相手はドラゴンだ。砂に潜るから、羽は退化して無くなっているが、それでも砂中から襲われるのは、多大な被害をこうむることになる」

「別に強そうには見えないけどな…。俺少しだけ上級の精霊魔法覚えてるし…」

俺たちの作戦はこうだ。

まず砂嵐を解除させるために、カーラが鉱石を持って逃げる。

（これはドドリアスが、鉱石を取っていった相手を追う時に、砂嵐を解除するということらしい）

その後、俺が精霊魔法を唱え、魔法を発動させる。

魔法によって怯んだところを、フルボッコという超簡単な作戦だ！！

その名も“囹使って、魔法使って、怯んだところやっちょおうZE！！” 作戦だ。

ちなみにドドリアスの皮膚は水を含むと、ボロボロになって耐久率が下がるらしい。

「という事で、カーラさん、よろしくお願いします！」

「何で私が…」

カーラは少し落ち込んでいる。

そりゃあ、敵の注意を集めないとその作戦は成功しませんから。

「大丈夫だって！俺が守ってやる！」

「…その言葉。信じているぞ」

そう言うとかーラは鉱石を取りに、ドドリアスの近くへと向かって行った。

俺はというと魔法の呪文を詠唱していた。

上級になると、呪文が長くなるので、いまから詠唱しないと間に合わない。

詠唱が終わる寸前、ドドリアスを後ろに携えたかーラがこちらに向かってきた。

「…ハア…ハア…は、早く放ってくれ！」

といっても、まだ詠唱が出来ていない。

かーラがもうドドリアスに食われそうになったとき、やっとの事で詠唱が終わった。

「かーラ！伏せろ…！」

俺は右手をドドリアスに向けると、右手に溜まっている魔力を解き放った。

——————“アイシクルエッジ”!!!!!!

アイシクルエッジ。

それは水属性の中でも敵に大ダメージを与える精霊魔法である。魔法を受けたドドリ阿斯は怯んだ。水分を含んだ皮膚がボロボロになっていく。

俺は回復する前に、右手に刀を構えると、攻撃を加えにドドリ阿斯の目の前まで移動した。

すでにカーラは遠くまで、避難している。

「死ねや!! モグラ野郎!!」

ズバァァン!!

すこしドロドロで、切った感じがしなかったが、ドドリ阿斯の右前足に深い切り傷が出来た。

これで移動スピードが下がった。俺は追い討ちをかけようと近づいたが、反撃をしてきた。

——グオオオオオオン！！

「っぐ！」

なんとこちらに顔を向けると口から、俺の頭よりでかい石を吐いてきた。

いうならロックブレス。しかもスピードが速く、わき腹に掠ってしまった。

掠ったと言っても、石なのでわき腹はズキズキして痛い。俺はそれで怯んでしまった。

ドドリアスがその隙を見逃さず、怪我をしていない左前足で攻撃してきた。

「…っぐ！…そんな攻撃、当たらねえ！！」

俺はわき腹の痛みを堪えながら後ろに下がると、反撃するため、ブレスを気を付けながら、

俺に当たらず、空をきった左前足を3回切りつけた。

ザシュッ！ザシュッ！ズバァァン！！

――――グオオオオオン！！

「これでとどめだ！！」

俺が首を切りつけ止めを刺そうとすると、ドドリ阿斯は抵抗し、砂嵐を起こし始めた。

最も鉱石を巻き上げるほどの暴風ではないが、それでも人間をふっ飛ばすほどの風だった。

俺はその風に耐え切れず、空高くふっ飛んだ。

空中で風魔法を使い、体勢を整えて下を見ると、ドドリ阿斯がこちらに向かって、

ロックブレスを放とうとしていた。しかも溜めが長く、特大の石が飛んできそうである。

俺はその光景に冷や汗をかき、ふと思い出してカーラを探した。

さっきの暴風を受けていなかったらいいが…。

カーラを探すと、少し離れた場所に倒れていた。

目がいいので見てみると、頭から血が流れている。どうやら石が当

たったようである。

俺は頭に血が上るのを抑えると、ドドリアスを見た。今にも石を解き放とうと、タイミングを計っている。

考えている間にも俺の体は、落ちている。

俺は刀を両手に握ると、足を上に頭を下にした体勢にした。

その後、風魔法を応用し、刀と体に風を纏わせ、風をドリルのように回転させた。

風魔法と重力を利用した俺の体は、目では追えないようなスピードを出していた。

外から見ると竜巻が空から降ってくるような光景だろう。

俺が落下してくるとともに、ロックスブレスを溜めに溜め、

タイミングを計っていたドドリアスは、超特大の隕石のような石を俺に向かい放ってきた。

俺はその大きな石に向かい奥義を発動した。

――――― “神華流秘奥義 流れ星”

>i16974—2062<

「知らないてん……じょうでもないし、知ってるし…」

俺が目覚めるとどうやら、よく知っている天井が見えた。天井というか…布？。

どうやらテントの中にいたようだ。俺のほかには誰もいない。外からはいい匂いがしてきて、俺のお腹がぐうぐうと鳴った。

俺は布団から出ると、入り口の布をめくり外に出た。

外に出るとそこはマカラス砂丘の手前のオアシスのようだった。

テントの近くではカーラが倒れた木に座りながら、料理を作っていた。

時刻は夜。満天の星の下。炎の光は幻想的に光っていた。

「よお。カーラ。どのくらい寝てた？」

「！？あ、ああ、アル兄いか。驚かせるな。そんなに寝てないよ。
5・6時間ぐらいじゃないか？」

「…そうか。なんか寝てる間にあったか？」

「いや。モンスターが何匹か襲ってきたが、私の敵じゃないよ」

「それならいいが…」

カーラはそういうが、別にカーラはそこまで強くは無い。

俺がいるから戦えるが、一人ではそうそう何匹も戦えるわけではない。精々7、8匹が限界だろう。

その証拠にカーラの体はボロボロである。まあ、わざわざ言わないけどね。

「まあ。二人とも生きているんだ。結果オーライじゃないか！」

「そうだね…」

「とにかくご飯を食べたら、すぐに寝よう」

「私は水浴びしたいよ。今日は汗かいたからね」

「それもそうだな。俺も血だらけだし」

俺の血はあまり出てないがドドリアスの血がついてしまって気持ち悪い。

俺たちは夕食を終え、水浴びをした後、テントの布団に入るとカーラはすぐに寝てしまった。

俺はずっと寝ていたので、周りを気にしながら夜を明かした。

次の日。

気付かなかったが、テントの端っこにマカラス鉈石や他の鉈石が、山のように大量に、
積まれているのを見たときは、流石に驚いた。カーラはどんだけ欲張りなんだろうか

続く

第7話 土竜“ドドリアス” ※挿絵あり（後書き）

いやはや…バトルシーンは難しい。

今回は少しアルミージュが苦戦しました。

次回もよろしく!!

第8話 出発

— — — — — sideアルミーシュ

三日後。

俺たちはやっとの事でアルバナへと帰ってきた。

帰ってくる時も、なかなかの数のモンスターがいた。

まあ俺の敵になるわけも無く、全部纏めてぶっ飛ばしてやった。

あと1つ報告。

あの戦いが終わり、その後寝て、朝になって起きたときの事なんだが、

なんか体の調子がいいというか、魔力やら身体能力が上がっていた。多分だがミリアから貰った能力が原因だと思う。

身体の限界がなくなっているし、魔力の扱いや体の動かし方とかの才能が開花したんだろう。

まったくチート気味な能力だと思う。まあ選んだのは俺だが…。

とにかくアルバナに着いた俺たちは、とりあえず宿へと向かった。

俺は荷物を部屋に置くと、早速ガマローネのところに行くことにした。

カーラは休んでおくというので、俺は一人で部屋を出ると、屋敷を目指し歩き出した。

[illegible]

「ほら。これが例の物だ」

「おお！よく取れたものだ。感謝するぞ！」

「そんな事はいいいから、ガマローネに会わせてくれないか？」

「そうだな。案内しよう」

なんか例の物って言うと、なんか悪い事してそうだと思った。

まあそれはいいとして、俺はペドロ、パドロに案内してもらい、ガマローネのいる部屋の前へと来た。

「いいか？ガマローネ様に失礼な事はするなよ！」

「わかってるって…」

ペドロはそう言うと、部屋のドアを開けると中に入ってしまったので、俺も後に続いた。
中に入ると大きなカエルが座っていた。

「ガマローネ様！マカラス鉱石を持ってきました！」

パドロはそういうとマカラス鉱石をガマローネへと渡した。

「おお。これがあマカラス鉱石かあ。でかしたぞお」

「この者がマカラス鉱石を持ってきた者です」

ペドロはそう言うと、俺をガマローネの前に押し出した。

「：お、押すなよ！」

「さあ。自己紹介をするんだ」

「わかつている。：ゴホン。この度マカラス鉱石をお持ちしました、アルミーシュと申します。

私はドリスドール王国、公爵家の一人息子でございます。以後お見知りおきを」

「これわあこれわあ、ご丁寧にすまんなあ。して今回の事、見事であつた。

なにか渡せる物があればいいが、私には武器などしかないのだ。

何かあればあ、用意させよう。何がいいのだ？」

「武器などは私はすでに持っております。噂によるとガマローネ殿は、

合成が出来ると聞いておりますので、合成する場合の金額を低くしてもらいたいと思います」

「そうかあ、そうかあ。そんなことならあお安いごようだ。すぐに各地のガーマン達にもお、伝えようおではないかあ」

「ありがとうございます。これにて私の用は終わりましたので、又の機会にお会いしましょう」

「それでわなあゝ」

俺はそう言い踵を返すと、ガマローネの部屋を出た。

久しぶりに丁寧な言葉を使ったので、口が疲れた…。

あまり使いたいとは思わんな。シズナはよくこんな言葉使うなゝ。
尊敬するわ、マジで。

そんな事を考えながら、宿に戻り部屋に入ると、ちょうどカーラが着替えをしていた。

しかも上着を脱いでる。マジ、パネェ！！ま、興奮はしないけどね！

「……………」

しかしこの沈黙は厳しい物だ。
どうしたものか……。

「さ、さあ。今日はもう寝ようかなあ！」

俺は結局無かったことにした。

「そ、そうだな／＼／＼／＼そろそろ寝ようじゃないか！／＼／＼／」

どうやらカーラも乗ってくれたようだ。

まあガマローネのところに行ってる間に暗くなつたし、
ご飯は各自で食べていたので、寝ることになった。

俺たちは各自のベットに入ると、そのあと無言のまま、眠りについた。

／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／
／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／

次の日。

俺たちは宿の一階で朝食を食べていた。

「それでカーラはどこに行きたい？」

「アル兄が行きたいところに、行ってくれたらいいよ。よく判らないしね」

「それもそうか…」

じゃあ次はこのまま南下して、フランドール山脈くグリードって感じでもいいか。

「とりあえずぐりー…」

「どうかしたか…？」

やべえ。そういえばシーザーがいるじゃねえか！！

このままカーラを連れて行くと最悪思いつくかも知れねえ。どうしようかなあ。…もうミディアスの野郎。ややこしい事するか
ら面倒じゃねえか。

一回バランドールに戻ってカーラを預けに行くか。
バランドールにはレナードがいるが、貴族の住む区域にはあまり来ないだろう。

「…いや、なんでもねえ。とりあえずバランドール王国に向かおう」

「わかった。でもなんでバランドール王国なんだ？」

「あそこには、俺の実家があるんだ。そこでカーラを鍛えてもらおうと思う」

「…アル兄いの実家か。でも誰が鍛えるんだ？アル兄い？」

「いや俺のとこのジジイだ。激強いぞ。師匠だからな」

「師匠なのか…強そうだな…」

「今日の昼には出よう。準備は済ましておけよ。カーラの特注の防具は、この後取りに行こう」

「わかった」

俺たちは大体の事を決めると、昼食を食べて、宿を出た…。

「わかった！」

俺たちは南門をくぐると、一度バランドールに戻るため、砂漠を進みだした…。

続く

第9話 バランドール、再び…

— — — — — sideアル
ミーシュ

アルバナを出た俺たち。

ラグニツシュ砂漠を越え、ノルディア坑道、クレイドール平原と敵を倒しながら、

俺たちはついにバランドール王国へとやってきた。バランドールよ！私は帰ってきた！

「ここがバランドール王国…」

「いいところだろ？カーラ」

「…うん」

どうやらカーラは、アルバナとは違う雰囲気気が気に入ったようだ。まあ基本アルバナとは違い、自然が多いく、水が豊富で、この方がいろいろ豊かだろうしな。

「…うん」

「…マジか」

あれ…？言ってなかったか…。まあ別にいけない事でもないし、いいけど…。
とりあえず中に入るか。

「まあいいじゃねえか。俺が貴族でも。俺は、俺だ」

「…うん。それもそうだね…」

「とにかく入ろうぜ！」

俺はきりのいいところで話を終えると、屋敷の中に入ることにした。
俺達が屋敷に入ると、いきなり俺に向かって蹴りが飛んできた。

「バカモンがあああー！！！！」

「うおおおおい！！」

スカッ

ドガアアアアアン!!!!

「てめえ！　いったい何しやる！！」

「それはこっちのセリフじゃあ！　まさか少女を誘拐とは…不甲斐ない！」

「おおおい！！　なに勝手な想像してんだ！　というか誘拐なんてするか！　このくそジジイ！」

「なんじゃとおお！！　くそジジイとは何じゃ！！　お爺様と呼ばんか！　この若造が！！」

「うっせえ！　俺が人生の引導渡してやろうか！　いい加減くたばりやがれ！」

「いい度胸じゃ！　ワシが直々にボコボコにしてやるわい！」

「やんのか、こらあ！！」

「やるか若造!」

その時なぜか白熱していた空気が、凍りついた。なぜか体が振るえてしまう。

「……………二人とも。死にたいんですか？」

「いえいえ! そんな事ありませんよ。お婆様! いえ! 女王さま! (ぶるぶる)」

「そうじゃ! そうじゃ! ワシら超仲良しじゃよ! 喧嘩しないんじゃよ! ほんとじゃよ! (ぶるぶる)」

「……………次は無いと思っていてください。二人とも」

「「イ、イエッサー!」!」

毎度思うが婆さん怖すぎるぜ。この夜は眠れないかもしれないねえ…。

「…アル兄い」

「ん？ああ。そうだったな」

「それでどうしたんじゃ？いきなり帰ってきおって。それにその少女は…」

「ああ。こいつはカーラ。アルバナで孤児だったんで連れてきたんだ」

「こんにちは」

「ああ。こんにちは。それでこのカーラちゃんをどうするんじゃ」

「少し危険な場所に行くんでな。帰ってくるまで預かってもらおうと思ってな。無理か？」

「とんでもない！大歓迎じゃよ。子供が増えたようで、嬉しいことじゃ…」

「まあ、それならいいんだが…」

一応カーラには、バランドールに着く前に説明してある。

最初は私も行くとゴネていたが、説得したら渋々納得してくれたようだ。

まあ着いて来られても困るので、一緒に来られてもどうしようもない。

「あと爺さんには、カーラに戦い方や旅の仕方を簡単に鍛えて欲しいんだ」

「それはいいが、ワシの修行は厳しいと思うぞ」

爺さんはそういうとカーラの方に向いた。

「はい！がんばります！」

「そうか。では明日から修行をするでしょう」

「俺は今日泊まって明日に出ようと思う」

「じゃあ今日はご馳走ね」

婆さんはにっこり笑うと、夕食の準備をし始めに食材を買いに行っ

た。

ちなみにここは公爵家だが、家事など最低限の事は自分でやっている。

まあ洗濯は力を使うのでメイドさんに任せているが…。

それでも他の公爵家より召使いの人数は少ないであろう。

「とりあえず、爺さん。いっちょ戦わねえか？」

「いいじやろう。捻りつぶしてやる」

「へっ！言ってる！」

俺たちは結局、婆さんの夕食が出来上がるまで戦いつづけた。

俺は夕食を食べ、久しぶりに実家の風呂に入ると、すぐにベツトに入り寝た。

今日は爺さんとの戦いがあったので、非常に疲れてしまった。

[illegible]

「じゃあ、行ってくるわ」

「モンスターには気をつけるんじゃよ」

「そんな事わかつとるわ」

ジジイと話していると、カーラが近づいてきた。

「…アル兄い。気をつけるんだよ」

「ああ。カーラも修行、途中でへばるなよ」

「うん。わかつてる」

「またな。なるべく早く帰ってくるから」

俺はそう言うのと自由都市グリードを目指し、歩き出した。

――――二週間後

俺はグリードへと向かうため、モンスターを使役した乗り物に乗っていた。

乗るといってもモンスターに乗っているわけではなく、モンスターが乗るところを持っているて、

それに俺たちが乗っているわけである。いろんな人種というか、色々な人型生物が乗っている。

やはりグリードにはたくさんの人が集まるようだ。

ここで知らない人の為に、グリードについて紹介したいと思う。

自由都市グリード。

巨大なモンスター、デミトールの背中に建設された街で、このモンスターを使役することにより、

周辺の鉱山などを行き来している。グリードは大豪富ドリスドールが街の実権を握っていて、

蒸気機関が発達しており、機械化が進んでいる都市である。

ここには鍛冶屋がたくさん集まっており、いろんな武器や防具があるので、

暇があれば、どんどん掘っていききたいと思っている。

しかし今回は別に用事はほとんど無い。

今回は無くなった薬や、道具を買いに行ったり、クエスト成功を報告しにきただけであり、

明日にはドグマホールに向け、出発したいと思っている。

バランドール王国を出る前、依頼を受けにいった俺は依頼を4つ受けることにした。

・クレイドール平原……二王国戦争の傷跡？

・ノルディア坑道……坑道に潜む蜘蛛？

・ラグニッシュ砂漠……赤い巨人への復讐？

・フランダー山脈山道……迫り来る巨影？

殆どがモンスターを討伐する依頼で、けっこう危なかった場面もあったりしたが、一応大きな怪我も無く、無事終わることが出来た。内容については自分たちで調べて欲しい。

説明している間にグリードに着いたようだ。

俺は乗り物から降りると、メインステーションへと向かった。

メインステーションにきた俺は、さっそくダウンタウンに行くため、蒸気機関車の切符を買った。

切符を買った俺はエレベーターで上に向かうと、ダウンタウン行きの機関車に乗った。

ちなみに最初、シーザーに会おうかと思ったが、会えるとは思えないので行かないことにした。

まあ公爵家の名前を使えば入れると思うが、理由が無いのでやめた。

[illegible]

ダウンタウンで依頼達成を報告した俺。

4つ達成した俺はとうとうDランクから、Cランクに上がった。あと2ランク上がれば、ギルドを作れるので頑張ろうと思う。

まあそれは置いて、いまの時刻は昼。

お腹がすいた俺は商業区で昼食をとるため、商業区までやってきた。人がゴミのようだ！というぐらい人がたくさんおり、すごい熱気を出している。

でもブランドールと比べると空気がマズイ！機械化が進むと環境が酷くなる一方だ。

まあ別に気にするほどでもないと思うが、比べてしまうと月とスツポンだ。

昼食を食べた後、宿に行くと、ベツトに寝転びながら今後の事を考えた。

「(明日からはドグマホールを目指すとして、今日はどうしようかな…。

長くなりそうなのはしないとして、明日の旅のために道具とか買いにいこつかな？

しかし、ちゃんとドグマホールにシンナイトが隠してあるかが謎だな…。

まあ無かったらミリアを呪い殺すがな…。いったい何処に隠してあるやら…：めんどくせえ)」

どこに隠してあるかは俺も指定してなかったので、見つかるかわからない。

それにもし、もうウィザードがあるとしたら見つけれられてるかもしれないねえ。無いと思うが…。

とりあえずドグマホールの神殿に着いてから考えればいいだろう。

俺はその後宿を出ると、夜まで足りない道具を買いあさり宿に戻ると、

明日からの道のりを乗り越えるため、疲れをとるために眠りへとついた。

続く

第10話 虫の谷、そして…

— — — — — sideアルミ
ーシュ

さて、朝になってグリードを出た俺は、ドグマホールを目指し、虫の谷を歩いているわけだが……。

「…ここって確か、ハピタル族が住んでんだよね」

ハピタル族とは何ぞ？という方に説明。

背が低くウサギのような耳を持つ種族をハピタルという。

ハピタルは風の民とも呼ばれ、とても縄張り意識が強いのだ。

ちなみにハピタルは虫の谷にあるバツケイヤという集落に住んでいる。

ドグマホールに行くためには、ハピタルの縄張りの中を進むことになる。

しかしハピタルは縄張り意識が強いので、通ることが出来ない。さあここでどうやって進めば良いのか疑問に思うが、簡単だと思う。

単に縄張りの中進まなければ良いじゃん、って感じた。

原作ではレナード達はがつつり通ったが、別に通る必要もないと思う。

単に最短ルートが虫の谷であって、ここ以外のところを進めば問題ない：はず。

まあまずハピタルの縄張りが何処まであるのか、わかんないんだけどね。

もし進むことになるとしたら、ロツコでも拾おう。生まれてるかわかんないけど…。

あいつら全員ちっちゃいから、年齢がわかりにくい…。

まあ適当に進んでいくか。ハピタルに襲われても、蹴散らすしな…。

[illegible]

2時間後。

俺は未だに虫の谷を進んでいた。

この谷、広すぎ。少し前にめちやくちやデカイ、グリーバーが横を

通っていった。

ハピタル達がグライダーで上を飛んでたけど、俺は隠れていたので見つからなかった。

というかグリーバー超キモイ。つかデカイ。なんであんなに成長したんだろうか。

俺が虫の谷を進んでいると、なにか前方の方で小型な何かが、リトルグリーバーに襲われていた。

横にグライダーが落ちていたので小さな奴はハピタルだろう。

今にも食われそうになっていたので、考えるのは後にして助けることにした。

「横から、ドーン！」

ズシャア！！

————ギヤアアアス！！

横から近づき、リトルグリーバーの胴を刀で縦に切ると、
深手を負ったリトルグリーバーは痛みを耐えながら、後ろに跳び下がった。

距離を置いたようだが、俺には関係ない。

俺は遠くにいるリトルグリーバーに一瞬で近づくと、右足を切り落とし、

痛がっている隙に頭の上に飛び上がると、頭を刀で一突きした。

流石に脳をやられたリトルグリーバーは倒れ、そこに亡骸を一つ増やした。

俺が死んだリトルグリーバーから降りてくると、襲われていたハピタルが近づいてきた。

顔にマスクみたいのを被っているので、誰だかわかんないが…。とりあえず俺はそいつに話しかけてみることにした。

「大丈夫だったか？」

「ああ。あんたが助けてくれたおかげで、俺は命を救われた！あんたの名前を俺に教えてはくれねえか？」

「俺の名前はアルミーシュだ。いまは旅人をしている」

「アルミーシュか！いい名前じゃねえか！」

「お前はなんていうんだ」

「おっとすまねえ。言うのを忘れてた。俺の名前はオズモンド。ウインドライダーズの一員だ」

……マジか。さすが俺。出会いの能力が効きまくりだ。
まさか虫の谷でオズモンドに会うことができるとは思わなかった。
しかもオズモンドを助けるとは……いける！

「どうした？」

「いや、なんでもない。しかしオズモンドは、なんでこんな所にいたんだ？」

「いや、恥ずかしいことだが、グリーバーのガスを採取してる時に、操作ミスをしちまってな。

ナンバーワンの俺様としたことが……。不覚だったぜ」

「そうだったのか」

まさかオズモンドが操作ミスとは……。まだリーダーでもなさそうだし、操作ミスぐらいあるか……。

「それでアルミーシュは何でここにいるんだ？もうすぐでハピタルの縄張りだぞ」

「ああ。ドグマホールにある神殿に用事があったな。そこに行く途中なんだ」

「そうなのか？じゃあ俺が送ってやろう。助けてくれたお礼だ。

あんたならバツケイヤに入ってもいい様に、俺からリーダーに頼んでおこう」

「そうか？そういうことなら頼もうかな。すまないな、オズモンド」

「いや、礼を言うのは俺のほうだ。それに俺たちはダチじゃねえか！」

「ダチか……それもそうだな。これからは助け合う関係だな。よろしく、オズモンド」

「よろしくたのむぜ！アルミーシュ！」

俺らはその後グライダーを直すと、バツケイヤを目指し、飛んでいた。

俺も後ろに乗らしてもらったが、風が最高に気持ちよかった。

俺はバックイヤーに着いた後、オズモンドが現リーダーに説明すると、歓迎してもらえた。

そしていまは朝。

俺はオズモンドが乗っているグライダーに乗り込むと、出発してもらった。

けっこうな距離を飛んでいると、下のほうに巨大な穴があり、そこに神殿部があつた。

「あそこでいいのか？」

「ああ。あそこに降りてくれ」

「わかった」

グライダーが神殿部に降り立つと、その神殿の大きさに驚いた。

「俺は帰るが、迎えはいいのか？」

「帰る手段はあるから帰ってもらっていい。ここまですまなかったな」

「いや、いいさ。それじゃ、また会おうぜ」

「またな」

オズモンドのグライダーが行くのを見届けると、俺はさっそくシンナイトの搜索を始めた。

[illegible]

「あつた……」

意外に早く見つかってしまった。30分も経っていないだろう。なぜかという和日本語で案内があった。さすがミリア、わかってらっしゃる。

案内で進んでいった先は行き止まりなのだが、壁には『ここに触れてください。BY愛しのミリアより』と書かれていた。

すこしメッセージの後の一言がウザイがいいだろう…。

俺が壁に触れてみると、壁が消え、真っ直ぐ下に下りる階段があった。

俺がその階段を下りていくと、そこには大きな扉があった。

俺はその扉を力強く押し開いた。すると中には……、

「すげえ……」

俺が見た先には巨大な騎士が佇んでいた。

姿形は騎士のような姿で、マントをしている。

体の色はベースが銀、所々に青が混ざり、マントは赤である。

シンナイトの前には、アークと思われる剣が四角い岩に刺さっている。

これを触れば、契約者の試練みたいなのを受けることになるだろう。俺は覚悟を決めると、その剣の柄に触れた……、

[illegible]

「……んん」は

柄に触れた後、俺はなぜか草原に場所にいた。

レナードは意味わからんところに行っていた筈だが、何故俺は草原なのだろうか……。

ふと周りを見てみると、遠くのほうに何かが刺さった大岩があった。俺は他に行くとこも無いので、その岩のところに行くことにした。

俺が大岩がある所に着くと、そこには金色の剣が刺さっていた。剣の横に石版が立っていた。読んでみると、この剣が抜ければシン

ナイトが認めてくれるらしい。

少し文字がかすれていたので、所々見えにくかったが、多分あっていると思う。

さっそく剣を抜こうとしたが……、

「ぬ、抜けん……」

そう。まったく抜けなかったのである。これはどうしたものか……。結構力は付いていたと思ったが、なかなかの硬さだ。

多分力づくでは抜けなくなっているんだと思う。心持とか何か条件があるのだろう。

俺は何が必要か、休憩をいれながらも考えつづけた。

約一週間後。

やっと岩に刺さっていた剣が抜けた。

一週間経っているが、お腹も空かないし、眠くもなかった。

恐らく時間が止まっているのであろう。外は時間が経っていないはずだ。

この一週間、俺がやってきたことは、過去を振り返ったり、仲間や育て親、

いままで会ってきた人たちの事を考えたり、鍛錬をしたりした。

そして、辿り着いた結果が“覚悟”。シンナイトを使用する場合の

覚悟。

そして人を殺す場合の覚悟など、いろんな覚悟が俺には足りなかった。

多分この世界の事をゲームの中だと、無意識に考えていたのだろう。実際にいろんな人と触れてきて、ここは現実なんだと思った。幻想とかではない。

そんな覚悟を固めた俺は剣を抜くことが出来たのである。

俺が感動していると、後ろから声をかけられた。

『問おう。あなたが私のマスターか』

その声に振り返ってみると……、

「……………なにしてんだ、ミリア」

『ただのお茶目です♪』

そこには某腹ペコ王の格好をしたミリアがいた。とりあえずイラッときたので頭を殴っておいた。

『イタッ！な、殴らないで。ただのお茶目です。冗談ですう〜』

「うっせえ。もう一回、殴るぞ。それでなんの用だ…」

『もお、そんなに怒らなくても…。用事は剣を抜いたからですよ』

「剣？これの事か？」

俺は右手に握る剣を見た。

『はい。それは選定の剣“勝利すべき黄金の剣”^{カリバーン}です。
これはシンナイトのアークですので、無くさないようにして下さい。』

「だれが無くすか…」

『あとここまで辿り着いた記念に二つの宝具を差し上げましょう。』

「宝具？そんなもん貰っていいのか？」

『もともと貴方は神界に行った時点で、神になれる存在です。
たぶんあの世界で死んだ場合、その後は神になることになるでしょう。』

まあ当然そのまま異世界を渡り歩いても良いですけどね。

その前に死というか、貴方に寿命はありませんけどね。あっても超長寿です。

宝具は神になれるぐらいの存在が、一つ、二つぐらい高位の宝具を持っていたても、

不思議ではないし、私たちが貴方の死に対して、失敗を反省した結果ともいえます』

「…まあ、貰えるもんは貰うけどね」

『一つ目は使用者の魔力を“光”に変換し究極の斬撃として放つ、星の鍛えた聖剣“約束された勝利の剣”^{エクスカリバー}です』

「これはまた一つ目から凄いな…」

『二つ目は使用者を妖精郷に隔離することであらゆる物理干涉や魔術干涉、

さらには魔法や平行世界・多次元からの干涉すらも遮断し、

また傷や病、老化をも癒す、ランクEXの結界宝具“全て遠き理^{ヴァロン}想郷”

これは“約束された勝利の剣”^{エクスカリバー}の鞘です…』

「二つ目の方が凄いじゃねえか」

『ちなみに妖精郷とは、現実より少しずれた異次元といったところ

ですね』

「そうなのか？よくわからんが…」

『この二つは、心の中で名前を呼びだせば出てきます。』

それまでは異次元にあるので、必要なときは呼び出してください』

「わかった」

『あとシンナイトの名前を決めてください』

「…そうだな。“アルトリア”で良いんじゃないか。確かアーサーの別名じゃなかったっけ？」

『それでいいですね？』

「ああ」

『では、この後の人生も楽しんでください』

「後悔はしないようにするさ…」

Year	1990	1991	1992	1993	1994	1995	1996	1997	1998	1999	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019	2020	2021	2022	2023	2024	2025	2026	2027	2028	2029	2030	2031	2032	2033	2034	2035	2036	2037	2038	2039	2040	2041	2042	2043	2044	2045	2046	2047	2048	2049	2050	2051	2052	2053	2054	2055	2056	2057	2058	2059	2060	2061	2062	2063	2064	2065	2066	2067	2068	2069	2070	2071	2072	2073	2074	2075	2076	2077	2078	2079	2080	2081	2082	2083	2084	2085	2086	2087	2088	2089	2090	2091	2092	2093	2094	2095	2096	2097	2098	2099
1990	1991	1992	1993	1994	1995	1996	1997	1998	1999	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019	2020	2021	2022	2023	2024	2025	2026	2027	2028	2029	2030	2031	2032	2033	2034	2035	2036	2037	2038	2039	2040	2041	2042	2043	2044	2045	2046	2047	2048	2049	2050	2051	2052	2053	2054	2055	2056	2057	2058	2059	2060	2061	2062	2063	2064	2065	2066	2067	2068	2069	2070	2071	2072	2073	2074	2075	2076	2077	2078	2079	2080	2081	2082	2083	2084	2085	2086	2087	2088	2089	2090	2091	2092	2093	2094	2095	2096	2097	2098	2099	

俺の右手には“勝利すべき黄金の剣”があり、左手には“全て遠き理想郷”に入った“約束された勝利の剣”があった。

「アルトリアか……」

「…よし、帰るか！ バランドールへ！」

俺はアルトリアを持って帰るため、あの広いところまで戻ると、呪文を唱えだした。

《古の聖剣を抜きし異なる世界の王アーサーよ、我に力を……変身
！！》

呪文を唱えながら、鞘から抜いた剣を地面に突き刺すと、俺は騎士へと変身した。

『やっぱ視線がデカイな……。まあ、あんまし気になんないけどね』

俺はそのまま目の前の崖にダイブすると、マントをばたばたとなびかせながら空を飛んだ。

白騎士が空を飛べるかは知らないが、俺の騎士は空を浮遊することが出来る。

どういう原理か知らないが、多分魔力的なパワーで飛んでいるんだろうと思う。

そんな俺はバランドールを目指し、地上より遥か上空を飛んでいた。

続く

第10話 虫の谷、そして…（後書き）

やっとシンナイトができました。

いつ原作入りするかは秘密ですが、もう少しだと思うので楽しみに。

次回も読んでくれたらうれしいです。

それでは…。

第11話 原作突入

――――7年後

――――
eアルミーシュ――――s i d

「やっとか……」

おっす！久しぶりだな！

やっとかさ、原作突入の年だ。待ちわびたぜ。

原作突入前にこの7年間の事を簡単に説明したいと思う。

7年前、シンナイトの“アルトリア”に変身し、バランドールに帰った。

直接じゃなく、近くの平原に下りて変身を解いてからだがな。流石に直接、王国に行ったらやばいしな。

その後公爵家に帰った俺はまずカーラをどうするか迷った。

流石にずっと此処にいる訳にも行かないし、どうするかカーラに聞いてみた。

すると修行を終えた後は、世界を周ってからアルバナに戻るらしい。やはり育ってきた場所だから、恋しくなったのだろうか。まあ戻りたいというならそれで良いが…。

カーラは俺が戻ってきた時、既にけっこう雰囲気が変わっていた。まだまだ荒いが俺がここを出るときより動きが洗練されていた。さすがジジイだな。

その後一年ほど爺さんの下で修行したカーラはバランドールを出て行った。

カーラが出て行った後、俺はクエストを受けまくった。といっても他の奴に迷惑がかからない程度にだ。

あまり受けすぎると、他の奴らに恨まれる可能性があるからな。そういうのは面倒だ。

俺はギルドランクをB↓Aと上げると、ギルドを立ち上げた。名前は“円卓の騎士”。

やっぱアーサー王との関係があって、カッコイイ名前じゃないと。

それに騎士という言葉も、あながち間違いじゃない。

俺のギルドはバランドールの王族が危機に瀕したとき、助ける役目を持っている。

これは俺が以前王妃を助けたので、王様に頼まれたのが切っ掛けだ。近衛騎士や王国騎士にならない代わりに、この役目をおった。

別に襲われない限りは普通のギルドとあまり変わりはない。

俺のギルドは貴族だろうが、平民だろうが格差はあまり気にしてい

ない。

まずそんなのにこだわる奴はギルドに入らせなかった。

最初は王族を守ると聞いて、プライドが高そうな貴族が何人かやってきたが、

平民をいろいろ言う奴はぶっ飛ばして、ギルドを出て行かせた。

俺に文句を言う奴は俺が公爵家だというと、顔を真っ青にして逃げていった。

そんなことがあった所為か、ギルドにはいる平民が増えていった。

まあ流石に増えすぎても嫌なので、試験を受けさせて合格した奴だけをギルドに入れた。

最初は俺とギルドメンバーをあわせても、13人しかいなかったが、設立1年で30人、2年で80、3年で120、と増えつづけ、現在ではメンバーは約650人になり、

ここらでも最強のギルドになっている。道を歩けば有名人みたいな扱いだ。

ギルドの本部はバランドールにあり、パーモ、アルバナ、グリード、バツケイヤに支部がある。

バツケイヤには最初渋っていたが俺が交渉をして、なんとか支部を建てさせてもらった。

人数が増えるに連れ、規律や試験が厳しくなったが、ギルド内の雰囲気は明るいもんである。

大体は自由なので、クエストに行ったり、どこかに出かけたりと楽しいもんだ。

ギルドの服装は基本は自由だが、幹部やリーダーである俺は国から

支給された服を着ている。

少し嫌だったが、なぜかシズナに絶対着ろといわれたので、渋々着た。

どうやらこの服はシズナがデザインしたらしく、黒がメインの軍服みたいである。

俺は少し服が堅苦しかったので改造した。少し開放的になっている。幹部も大体各自の好みに合わせて改造している。シズナに許可は得ているので大丈夫だ。

幹部は全員で12人。俺を合わせれば13人になる。メンバーは後々紹介しようと思う。

ギルドの建物は大体街の真ん中に立っていて、結構な大きさがあった目立っている。

建設費は俺んちや国が出してくれたので立派なものである。

まあ俺のギルドは少年少女の憧れになっているはずだ。

そういえば家の事で思い出したが爺さん婆さんは、2年前の冬に亡くなった。

殆ど同時に死んだんではないだろうか、まさかの突然で疑ってしまった。

悲しかったが、二人とも元気がどんどん無くなっていたので、覚悟はしていた。

公爵家は俺が継ぎ、家は俺が帰れないので執事のロバートさんに任せておいた。

継ぐことになったので俺の名前が正式に代わった。

名前はアルミーシュ・フォン・ミレイシス卿。長すぎだ。

面倒なので周りには、いままでと一緒でアルミーシュと呼ばせている。ほとんどアルと呼ぶけど…。

この7年俺がギルドにいたわけではなく、クエストをこなしたり、修行をしたりと、世界を回りながら、過ごす方が多かった。

グリードにギルドの支部を建てさせてもらうために、ドリスドール伯爵の屋敷に行ったときは、

シーザーに会ってしまい、少し動揺してしまった。まだ14歳くらいで少し幼さが漂っていた。

伯爵も原作どおりベットに寝ていて、病弱だったのが印象的だった。

パーモでもユウリが俺を見た瞬間、弾丸の様に飛び込んで来たのでビックリして受身が取れなかった。

久しぶりにみたユウリは少し女らしさが出て、膨らむところが出て、引込むところは引込んでいた。

その日はユウリの家でお世話になり、夜寝ようすると、一緒にベットで寝ようとするので、

力尽くで追い出した。翌日なぜか追い出したはずのユウリと一緒に寝ていた。あれは今でも謎だ…。

アルバナでもカーラとあったが、例の酒場で踊り子をやっていた。

聞くとクエストをしながら、酒場で踊り子をして生活をしているらしい。

一応カーラは円卓の騎士に加入している。といってもあまりクエストは受けないので下っ端らしい。

そして一番本部の近くにいるレナードだが、原作どおりワイン商で働いている。

あまり俺は王国にいないから見ないが、普通に元気に暮らしているらしい。

まあ俺的には元気に暮らしていればそれで良いので、良しとしよう。

そしていま現在。

俺は旅を終え、バランドール王国へと戻ってきた。

ここ2年は戻っていなかったので、ギルド本部に顔を出すのも久しぶりだ。

連絡番のビグロで連絡は取っていたので、まったくというわけではないが…。

おつと…。ようやく門が見えてきた。

そういえば今日はウィザードがサーカス団としてやって来るんだっ
たな。

くる前に潰しても良いが、それでは物語が進まない。

放っておいても良いだろう。俺がいる限り、国が潰れることはない。
俺はとりあえず何をするにもギルドに戻ることにした。

「いま帰ったぞ」

「あ！ギルド長が帰ってきたぞー！」

「おつかれっす！」

「今回は長かったですね！どうでした？」

「まあまあだったな。お前らは仕事に戻れよ」

はゝい、とギルド員の返事を聞いた後、俺の自室である執務室を指し、歩き出した。

「おかえりなさいませ、ギルド長」

「ああ。ただいま、ミルキー」

コイツはミルキー。

俺の仕事の補助をするのが仕事で、俺がいない時に俺の代わりをしてくれる優秀な奴だ。

ウチのナンバー2で、見た目は秘書みたいだが、結構な強さを持つ女性だ。

見た目は青髪に、ボン、キュ、ボンという完璧さを醸し出している。

大剣を主に使っていて、見た目とは違い、凄い怪力でブンブンと大剣を振り回す。

魔法はあまり得意ではなく、神聖魔法と精霊魔法を少し使うぐらいである。

唯一の弱点は弓が壊滅的に使えない事だが、別に困ることではないのでよしとする。

「どうしました？」

「いや。なんでもない。それより俺がいない間に何かあったか？」

「いえ。それほど大きな出来事はありませんでした」

「そうか…。それならいい」

「今日のご予定は？」

「この後、公爵家当主として城に向かう。シズナ姫の成人際だからな」

「警備の方はどうでしょうか」

「城の周りど、城内に何人か入れといてくれ。詳細はミルキーに任す」

「わかりました」

俺は適当にダンスを何人かと踊ると、部屋の壁際にもたれながらワインを飲んでいた。
少し離れたところには若い女性達が俺を見てキャアキャア騒いでるが、この際無視だ。

俺ぐらい有名になると女性達が騒がしい。もともとこの容姿のせいでモテていたのに、
色々有名になった所為で、俺のファンが増えていった。男性の場合は俺の武勇伝に、
女性は俺の容姿などカッコよさに惚れていくようだ。時々オカマみたいのがいるが、ぶっ飛ばす。

俺が扉を見ているとレナードとユウリが入ってきた。
そろそろか、と思っていると階段の上からシズナが降りてきた。
別に王妃は死んでないので、暗い表情はしていない。

王も王妃も普通にシズナの晴れ姿に喜んでる。まあそれもそろそろ終わるわけだが……。

そう思ったその時。外で爆発音と、住民たちの悲鳴が聞こえてきた。
最も城下町にはギルドメンバーがいるし、円卓の騎士の幹部が何人かいるので心配はない。

ちなみに城内にも何人か幹部がいる。いつもは世界中に散らばっているが、何人か集合させた。

城内の配置は、王と王妃に一人ずつ、フォーリアのダラム大公に一人ついている。

シズナは最重要人物なのでトップの俺が護衛についている。

俺はシズナの元にいくと、小さな声で聞いた。

「大丈夫か？」

「大丈夫です。特に異常はありません」

「それはよかった」

「どうしますか？」

「とりあえず避難だな」

俺はそう決めた瞬間、城の出入り口が大きなモンスターによって破壊された。

しかしモンスターは既に幾つか傷を負っていた。多分幹部の誰かがやっただろう。

別に王も王妃もシズナも殺させることはさせない。

こいつの名前はグレアデイモス。弱点は刺突と水だったはずだ。

俺はこのモンスターを倒すために、水属性の魔法を詠唱し始めた。

しかし敵も素直に完成を待ってくれる筈がなく、俺に襲い掛かってきた。

集中力が必要なこの魔法は途中で止めることが出来ないので、俺に攻撃は避けられない。

もう少しで当たるという所で、それを遮るものがいた。

「大丈夫ですか？ギルド長」

「さすがだ、ミルキー。もう完成した」

俺は完成した魔法を敵に放つため右手を振りかざした。

——————“オメガフラッド”！！

オメガフラッドは水属性最強の攻撃力をもつ魔法である。

それを受けたグレアデイモスはうめきを上げるとズシンッと音を上げ、崩れ落ちた。

しかし死んでない様なので、あとはミルキーに任すことにした。

「ここは任せたぞ。ミルキー」

「わかりました」

俺は離れていたシズナの手を取ると、避難するために走り出した。しかし出入り口は崩れて使えないし、そもそもウィザード兵がうようよいるので、逃げにくい。

俺がシズナの手を引きうろうろしていると離れたところに、漆黒の鎧を身にまとう騎士に襲われているレナードとユウリがいた。しかも、ユウリとレナードの剣は破壊され、今にも二人は切り裂かれそうである。

それを俺が許すわけなく、二人と漆黒の騎士の間に身を挟むと、振り落とされる剣を受け止めた。

「やらせないぜ」

「アルミーシュさん！」

「大丈夫か？ユウリちゃん」

「はい！なんとかですが…」

「まあそのことはあと、だ！」

俺は相手の剣を押し返すと、後ろに下がった漆黒の騎士に切りかかった。

相手はそれを横にずれてかわすと、こちらに袈裟切りで切りかかってきた。

俺はそれを刀で受け流すと、流れるようにそのまま横切りをした。相手の腹部分が少し切り目が付いたが、あまり深手にはならなかった。

相手は俺との戦闘が長引くとわかったのか、引いていった。
俺もそこで追いかけることもなく、レナード達に話しかけた。

「で、何でお前らがいるんだ？ここは関係者以外は入れないはずだが…」

「い、いや。レナードが勝手に…」

「ユ、ユウリ！？別に俺だけ悪いわけじゃないだろ！？ユウリも賛成してじゃないか！」

「そんな事いったっけ？忘れちゃった」

「そんな事ないだろ！」

「まあまあ。別に怒ってるわけじゃない。それより今は逃げる事が先決だ。行くぞ」

「それも、そうですね。行こ、レナード！」

「ああ。そうだな」

俺たち四人が進んでいくと、ウィザード兵がこちらに進んできた。人数は約20人前後。流石にこの人数を守りながら、戦うのは困難だ。

勝てるが周りに被害がでるので、城が崩れかねない。

俺が少しでも減らそうと戦おうとすると、横からおっさんが出てきてウィザード兵を切りつけた。

俺も動揺した兵達を倒しまくると、二分後には敵は全員地に伏せていた。

「すまなかったな。おかげで助かった。あんた名前は…」

「たいした事はない。わたしの名はエルドア。しがない旅人だ」

「エルドアか。俺の名はアルミーシュ。あるギルドのリーダーをしている」

「とりあえずここは危ない。こっちだ」

「ああ」

俺はエルドアの後を着いて行って、城の地下を進んでいった。

地下にも何人かのウィザード兵がいたが、全員倒していきとうとう地下の宝物庫の目の前まで来た。

「ここか…」

「どうかしたんですか？」

「いや…」

俺はユウリの問いに適当に返すと、目の前の門を見た。

俺が門を開けようと手を上げると、後ろの方で大きな音が聞こえた。後ろを振り返るとそこには、もう一体のグレアデイモスがいた。

こんなにいなかったはずだが、俺の存在によるイレギュラーだろう。

「はしれ！」

俺は大声で皆に注意すると、扉に手をかけ開け放つと、中に入り込んだ。

全員が入り込み、部屋の間まで進むと、扉が破壊され中にグレアデイモスが入ってきた。

俺は足止めするために後ろに振り返ると、他の全員に注意した。

「俺が足止めする。早く奥まで逃げ込め！」

今日は待ちに待った私の成人祭。これを終えれば結婚ができる年になります。

そうすればアルミーシュと……。きゃーきゃー、は、恥ずかしいです／＼／＼

でもそんな日に襲われるとは私に運はないのでしょうか…。

襲撃を受け、地下にある宝物庫までやってきた私たち。

アルミーシュが足止めしている間に、私たちが見たものとは……。

「なんだこれ……」

どうやら隣の、れ……れな……レナード？さんが宝物庫に置いてある物に驚いたようです。

私は父上に少し聞いたことがあったので、あまり驚きませんでした
が、実際に見ると大きいです。

そこには大きな鎧を来た巨人みたいなものがあり、その前には四角い石がありその上には、

短剣が突き刺さっている、片手しかない防具が置いてありました。

どうやらレナードさんがその防具を触りに行くようです。

横の女の人、確かユウリさんという人は、やめた方がいいと言っています、

レナードさんはその防具に吸い込まれるように進んでいきます。

「あぶねえ！」

その時、後ろからアルミーシュの声が聞こえてきました。

後ろを振り返ってみると、あの大きなモンスターがこちらに向かって襲ってくるのです。

私は少しでも逃げようと、あの大きな騎士のほうへ逃げていくと、突然ドクンツと心臓が鳴りました。

気になって私が騎士の方に振り返ってみると、レナードさんが防具に触っていました。

そのすぐ瞬間、私の意識は一瞬でしたが、途切れてしまったのです。

Year	1990	1991	1992	1993	1994	1995	1996	1997	1998	1999	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019	2020	2021	2022	2023	2024	2025	2026	2027	2028	2029	2030	2031	2032	2033	2034	2035	2036	2037	2038	2039	2040	2041	2042	2043	2044	2045	2046	2047	2048	2049	2050	2051	2052	2053	2054	2055	2056	2057	2058	2059	2060	2061	2062	2063	2064	2065	2066	2067	2068	2069	2070	2071	2072	2073	2074	2075	2076	2077	2078	2079	2080	2081	2082	2083	2084	2085	2086	2087	2088	2089	2090	2091	2092	2093	2094	2095	2096	2097	2098	2099
1990	1991	1992	1993	1994	1995	1996	1997	1998	1999	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019	2020	2021	2022	2023	2024	2025	2026	2027	2028	2029	2030	2031	2032	2033	2034	2035	2036	2037	2038	2039	2040	2041	2042	2043	2044	2045	2046	2047	2048	2049	2050	2051	2052	2053	2054	2055	2056	2057	2058	2059	2060	2061	2062	2063	2064	2065	2066	2067	2068	2069	2070	2071	2072	2073	2074	2075	2076	2077	2078	2079	2080	2081	2082	2083	2084	2085	2086	2087	2088	2089	2090	2091	2092	2093	2094	2095	2096	2097	2098	2099	

《……变身！！》

…危なかった。

どうやらレナードが変身して、防いでくれたようだが、もう一瞬遅れていたら危なかった。

そんな事を言っているうちに白騎士はグレアデイモスと共に、上に移動してしまった。

「俺たちも行こう！」

全員の返事を聞くと、俺を戦闘に白騎士が戦っているであろう場所を指し、俺たちは走り出した。

俺たちが上に辿り着く時には、もう決着がついていた。

俺の攻撃で傷も増えていたし、なんせ白騎士が相手というなら、負けるはずがない。

俺はとりあえず、シズナを安全なところに避難させようと……、

「どうやら負けてしまったようですね…」

「!?!」

声の方を見ると、シズナがサルベインに捕らえられていた。

油断していた！この戦力差で敵がいるわけがないと思っていたし、

漆黒の騎士は俺が傷を負えさせたから来ないと思っていた。

一番の失敗は、この時点でサルベインがバランドールを裏切るとは思わなかった。

「シズナ！」

「（カチャ）動かないで頂きたい。アルミーシュ殿」

「つく！」

サルベインはシズナの首元にナイフを突きつけている。
この状態では俺のスピードでも助けることが出来ない。

「アルミーシュ！私の事はいいのです。早くサルベインを！」

「しかし……」

「無駄ですよ。この男がシズナ姫を殺させるわけがない」

「黙りなさい！この裏切り者！」

俺たちがなかなかシズナを助けることが出来ないでいると、上から
巨大な碇が落とされてきた。

サルベインはシズナと共にそれに乗ると、一緒に漆黒の騎士と小太
りな男が乗った。

「では機会があれば、またお会いしましょう」

「アルミーシュ！」

「シズナーーーーー！！！」

俺は上に離れていくシズナに、なのもする事が出来なかった。

みんな、俺が騎士を使って追えばいいんじゃない？とか思っているよ
うだが、

俺の騎士は浮遊は出来ても、飛行は出来ない。あまりスピードが出
ないので変身しても、

追いつくことは出来ないし、俺の切り札を見せることは得策ではな
いからだ。

それにこれで物語が進むようだ。シズナは絶対に俺が助け出すし、
ウィザードはぶっ潰す。

とりあえずグラールゼルを倒し、セティに人格を元に戻すことにする。
そういえばカーラは大丈夫だろうか…。黒騎士は誰が使っているん
だろうか…。

俺はいろんな事を考え、途方にくれながらも突っ立っていた。

続く

第11話 原作突入（後書き）

今回はいい感じに長くなりました。

原作が始まったので、どんどん進んでいこうと思います。

次回もよろしく！

第12話 旅たち前夜（前書き）

前回のギルド員300人を、650人に変更しました。

第12話 旅たち前夜

――――――――――sideアル
ミーシュ

よお、昨日シズナを誘拐されてしまったアルミーシュです…。
まさかサルベインがこの時期に裏切るとは思わず、油断していたのが原因だ。

あのサル野郎！次に会ったら、絶対にぶっ殺す！俺にケンカ売ったこと、後悔するんだな……。

まあ俺の私怨は置いて、シズナが攫われた後の事を話そうと思う。

あの後、城の会議室に集まった王や王妃、ギルド長である俺、城の重役は、

シズナを救出をするため作戦をたてていた。

レナードやユウリ、エルドアと副ギルド長のミルキー、その他は謁見室で待っている。

「それでどうしますか、ヴァルトス王」

俺はヴァルトスにどう思っているか聞いてみた。

「ふむ：問題は誰がシズナを救出しに行くかだが…」

「近衛騎士は国王の護衛、王国騎士は復旧活動で手が離せないと…」

ヴァルトス王の言葉に重役の一人が呟いた。

確かにある程度強い騎士たちは手が離せないし、一般兵ではウィザードの奴らに敵うわけがない。

「あの白騎士を操ったというレナードという男を、シズナ姫の救出に行かせればいいのでは？」

あの力を使えば敵からシズナ姫を取り返すのも容易となりましょう」

俺は原作どおりにさせるため、国王に提案してみた。周りの重役達は平民だなんだ言っているが、ヴァルトス王は俺の言葉に頷くと、重々しい声で言った。

「確かにあの力を使えば、シズナを取り返すのも容易になるだろうな。

できればあの騎士は使いたくはなかったが、この現状ではしかたない」

「では…」

「うむ。シズナの救出をレナードに任せようと思う。彼には二人仲間がいたようだが、

用心を取ってアルミーシュについて行ってもらおうと思う。アルミーシュはギルド長であり、

大陸中にギルドがある。情報も集まりやすいし、彼の腕も相当な強さを持つと聞いている。

彼が着いていくならさらに救出も容易となるだろう。任せてくれるな？アルミーシュ」

「私の命に代えましても、シズナ姫を救出してみせましょう」

俺はそういうとヴァルトス王に頭を下げた。

「ではこの事をレナード達に離れた後、今日は休むとしよう。

出発は明日、準備を済ませた後行ってもらおう。今日はみなご苦労であった。解散」

ヴァルトス王の解散の言葉を聞くと皆、椅子から立ち上がると部屋を出て行った。

部屋にはヴァルトス王と俺、それと会議中一度も言葉を発さなかった王妃だけが残った。

「すまないな、アルミーシュ」

「いえ。これは自分の問題でもあります」

「別に私はそうは思わない。よく私や王妃を守ってくれた。感謝する」

「しかし…」

「もし後悔してるというなら、シズナをいち早く奴らから取り返してくれ。」

「少なくとも殺される可能性は低いと思われる。しかし油断はするな、アルミーシュ」

「…はい」

俺が国王に返事を返すと王妃が話し掛けてきた。

「アルミーシュ…」

「何でしょう、王妃さま…」

「無茶だけはしないでください。もし死ぬようなことがあれば、シズナが悲しみます。」

もちろん私や国王も……。いいですね？アルミーシュ：」

「わかっていきます。自分は死ぬつもりはありません。必ずやシズナを連れて帰ってきます」

俺の言葉を聞くと王も王妃も安心したようだ。

俺はそう言ったがシズナや仲間の命が危ないなら、命をかけてでも助けるが……。

とりあえず俺はレナード達に説明をするため王と王妃を促すと、レナード達の元へと向かった。

[illegible]

会議の事をレナード達に伝えた後、俺は明日の出発の準備をするためにギルドへと戻った。

戻る途中、シズナを助けに行くと伝えにくくために屋敷によってきた。

俺はギルドに戻ると、すぐに幹部を会議室に集まるように、各副官

に伝えさした。

俺は汚れた服を着替えると、すぐに会議室へと向かった。

俺が会議室に入ると既に幹部達は集まっていた。といってもバラン
ドールに呼んだ奴だけだが…。

今回俺が呼んだ幹部の数は3人。すでに国にいた幹部を合わせ5人
だ。

その3人を紹介したいとのだが、その前にギルド“円卓の騎士”の
仕組みについて話したいと思う。

このギルドはまず13つの部隊に分かれていて、各部隊には象徴と
なるものがある。

この13の数字は幹部の人数で、象徴はその部隊の目標というか、
好きなもの……まあ、そんな感じだ。

各部隊の象徴は物だったり、神だったり、花だったりいろいろあ
る。

今回はバランドールにいる奴だけ紹介したいと思う。他の奴らは後
々紹介していこう。

まず、俺ことアルミ―シユ率いる一番隊“アマテラス”。

人数は俺を合わせ約50人。大体の部隊がこの人数だ。この部隊は
13つの部隊の中でも精鋭中の精鋭で、

ここに所属するギルド員たちは、ほとんどがギルドランクAで、か

なりの強さを持つ奴らである。

正直言ってギルド長レベルの奴らが、うじゃうじゃいる部隊なので、ほぼ負けることがない。

といっても此処の幹部達は規格外なので、コイツらに負けることはない。

象徴はもちろん前の世界の神だ。それも日本の…。やっぱカッコいいじゃん！アマテラス。

次にミルキー率いる二番隊“ミディトリア”。

この部隊は主にギルドの運営を担ってくれている。

この部隊がいないと正直ギルドが成り立たなくなっていくだろう。

事務的な事をしているので、皆は弱いんじゃないか？とか思うかもしれないが、そんなことはない…。

他の部隊よりかは弱いかもしれないが、その辺のギルドの奴らよりかは断然、強い。

特にミルキーはやばい。半端なく力が強いので、敵をぶっ飛ばしていくのだ。

武器を使っても強いが、素手でも天才的な才能を発揮し、結構な強さを持っている。

そういえばミルキーの容姿を言っていなかったが、髪は紫がかった黒で、

長さはロング、ポニーテールにっていて、目は水色で少しさめた感じのクールな女性だ。

体は前に言ったとおり魅惑のボディを持っているらしい。ちなみに身長は高めの174？。

ミルキーには俺が国にいない間に、国を任せている。しっかりした奴で頼もしい。

ちなみに聞いてみたところ象徴の名は、昔憧れていた勇者の名前らしい。

次からは今回呼び出した奴らを紹介した後、部隊の紹介をしようと思う。

まずは五番隊を率いるキャリス。象徴は“メイジ”。

彼女は俺と同じで、バランドールに住む貴族の一人で、伯爵家のお嬢様である。

貴族のお嬢さまと侮って散っていった奴らは数え切れない。彼女は魔法の才能に溢れ、

精霊魔法の初級から上級まで全てマスターしており、神聖魔法においても、

ほとんどの魔法を覚えているという鬼才のお嬢さまなのである。

彼女はバランドールの賢者と言われるほどの使い手で、魔法のみで勝負するとしたら、

恐らくだが俺は負けてしまうだろう。特に目を見張るのは彼女の詠唱時間である。

俺が詠唱に10秒かかるとしたら、彼女の場合2秒で終わらせてしまうのだ。

これは魔法使いの弱点である、“詠唱中の無防備”がなくなるという、彼女の才能である。

次に彼女の容姿を紹介しよう。

彼女の髪は、お嬢さま風のくるくるで、大体腰までのロング、色は

金色。

目は少し釣り目で色は黄緑。身長は平均的な165cm。気になる胸は控えめでBカップ。

武器は主に杖を使っている。弓も使うらしいので見てみたが、結構凄いい。

性格は勝ち気のあるお茶目なお嬢様だ。

なぜか俺に話し掛けるときは、『アルミーシュさま〜♪』見たいな感じなんだが、

他の奴らには『ふんっ！話し掛けてもらわないでくれます？』みたいな、

高嶺の花みたいな感じらしい。まあ俺が好かれているなら、それで良いので放っている。

そんな彼女も部下には、色々教えていたりしているので根は優しいのだろう。

どうやら困っている人は放って置けない性分らしい。

彼女の率いる五番隊は魔法を使う奴らが集まっている。

ほとんどが上級を使ったりするので、火力は半端ない。

魔法といっても精霊魔法が主になっているので、神聖魔法は幹部であるキャリス以外、

五番隊の奴らはあまり使えない。といっても普通の奴らよりかは使えるだろう。

神聖魔法を主に使う部隊もあるが、それは後々紹介していこうと思う。

象徴の意味はその名のとおり魔法使いだ。シンプルに決めたと思う。

次に八番隊を率いるマイナール。象徴は“クナイ”。

彼は影が薄く、気配が殆どないに等しいので、何時の間にか部屋の中にいたりする。

俺は集中すれば気付くが、油断すると何処にいるかわからないほどの薄さだ。

本人も何でこんなに薄いのか、わからないらしい。調べたが結局謎のままだ。

彼は平民だが、その存在の薄さを武器に俺のギルドに加入した。

彼の容姿は、肩に掛かるぐらいの長さで闇に溶けるほどの漆黒の黒髪。

目は細めで少し鋭い黒目。顔は結構イケメンだろうと思われる。

だろうと言うのは、いつも顔を隠しているのでわからないからだ。

身長は178?と高めで、細いがガリガリという訳ではなく細マツチヨだ。

それと彼はあまり喋らないのが特徴だ。まあ寡黙であって、根暗ではないといっておこうか…。

彼の部隊はその存在の薄さを利用した暗殺部隊。

主にモンスターを相手しているが、時々人間相手の暗殺もしている。裏の仕事が多いので、顔がバレないようにしている。恨みをかけても仕方がないからな…。

この部隊はあまり表の世界では知られていない。このギルドに入ったときに教えている。

忍者みたいにシュパツと部屋に報告しにきた時は、少し感動した。

まあ八番隊はみんな忍者みたいな格好にさせたしね。そんな風に見えるのは仕方がない。

ちなみに象徴のクナイは俺が作って教えた。忍者だしいんじゃない??

最後に12番隊を率いるマイユリ。象徴は“歯車”。

マイユリはメガネをかけた天然の女の子だ。いつもつなぎを着て、カラクリを弄っている。

髪は後ろで一本に編んでいて、腰まであるロングで色は黒。身長は160cm。

胸がビックリするほど大きくGカップ。つなぎがぱつんぱつんで、歩くとぶるん、ぶるん動く。

ミルキーでもEカップぐらいなのに、これは大きすぎだと思う。初めて見たときは、

目が奪われてしまつて、横にいたミルキーに足を踏まれた。結構痛かつたのを覚えている。

かけているメガネはよくあるビン底みたいなメガネで、こちらから目がよく見えない。

気になって、一回外してもらったとき、凄い美少女だったので、メガネってすげえと思った。

その時マイユリがけっこう恥かしがり屋で顔が赤くなっていたことをここに記しておく。

彼女の部隊は主にカラクリ。

詳しく言うと罨や、ギルドで使うカラクリを直したりと、裏方みたいな仕事だ。

彼女の罨は心理的な事を配慮して作っているので凄い敵がかかってくる。

他にも彼女には車みたいな物や、戦艦みたいな物を作ってもらおうと思っている。

車は移動に便利だし、戦艦はいつかくるであろう戦いに備えてである。

彼女に作れるか聞いてみたが、作ろうと思えば作れるらしい。天才だ……。

ただ作る為の材料がないし、人数が少ないので作るのに時間がかかるらしい。

これを聞いたのはギルドを設立したときで、その時から俺は戦艦の建造を開始した。

あれから6年ほど経っているが、今のところ戦艦は一隻できそうな感じだ。

大きさはウィザードの持つ戦艦の約2・5倍。まあまあ大ききさだ。車の方は結構簡単に出来た。まあ機関車があるぐらいだから、そら車ぐらいできるわな。

象徴の意味は彼女の仕事に関係しているカラクリだ。

紹介は大体終わったが、次に今回のこいつらの仕事を教えよう。

一、二番隊は城内、場外の警護。

五番隊は大きな敵が出た時の大砲役。怪我人がいる時の治療。

八番隊はウィザードの幹部、及び雑魚兵の暗殺。

十二番隊は敵への罠の設置。

まあ簡単に言うところな感じだろう。

此処まで一度に説明したが、わかってもらえただろうか。

とりあえず会議を始めよう。みんな気になって仕方ないようだ。

「とりあえず皆、今回は敵の襲撃があったが、色々ご苦労だった」

「いえ。これも任務ですので」

「そうですよ、アルミーシュさま！」

「……………任務」

「そそそ、そうですよおー！…へう、ちゃんと言えませんでした…」

上から俺、ミルキー、キャリス、マイナール、マイユリも順番だ。

まあ個性的だが、その辺はスルーしてもらいたい。

「それでこれから如何するんです？ギルド長」

「城での会議では、明日出発の準備をした後、此処を出ることになっている。

俺もレナード達に付いて行く事になった。」

俺はミルキーの問いに答えると、椅子の背もたれに寄りかかった。そうしているとキャリスが俺に問い掛けてきた。

「ギルドはどうするんですの？このままミルキーに任せるといいうのもありますけど…」

「そうだな…ミルキーにはこのまま本部は任せるとして、キャリスにはしてもらい事がある」

「私にしてもらいたい事とは？城の護衛なのですか？」

「いや、キャリスには和平のために来ていたダラム大公の護衛を頼む。」

帰りに教われて死ぬ事になったら、フォーリアは内乱になるかもしれない。

この任務はマイナールにも付いてもらい、影から守ってもらう。頼んだぞ、二人とも…」

「わかりましたわ！」

「……………御意」

俺はあとマイユリのほうに向くといった。

「マイユリには今までと一緒に戦艦を建造してもらおう。いつできるかわかるか？」

「そうですねえ。このペースだとあと一年は掛かるかと…。
外見はほぼ出来ていますが、内装や武器、部屋割りなど色々決めることも多いですし…」

「なるべく早く完成させてくれ。任せたぞ、マイユリ」

「了解ですう」

俺は椅子から立ち上がり、皆を見回すといった。

皆真剣な顔をしている。俺のいつもと違う雰囲気気づいたようだ。

「今日から忙しくなるかも知れんが、全力を尽くして任務に当たれ！以上、解散！」

「」「」「御意！」「」「」

俺は皆の返事を聞くと、踵を返し部屋を出て行った。
明日から色々戦いが増えていく……。誰も死ぬことがなければいいが……。

俺は明日のため、これからの未来のため体を休めるため、準備を済ませるとベットへと入った。

続く

第12話 旅たち前夜（後書き）

今回は説明が多く、セリフが少なくなっていました。

まあ設定が多くなったので、こちらとしては大変な思いしかありません。

誤字などあれば連絡よろしくお願いします。

第13話 いざ、出発!!

— — — — —
ideアルミィシュ — — — — —
s

次の日の朝。

俺は旅の準備を済ませると、事前に決めていた待ち合わせ場所であるバランドール東城門に来ていた。

俺が着くとそこには原作メンバーであるレナード、ユウリ、エルドアの3人が待っていた。

：ふむ。どうやら俺が最後のようだ。まあ、まだ約束の時間三十分前だから早いほうだけど…。

「すまない。待たせたな」

「い、いえ。俺たちが早かったただけですから。気にしないでください」

俺が謝ると少し慌てたようにレナードが否定した。

まあ貴族が平民に謝ること自体珍しいからな。まず貴族は平民と喋らないしな。俺は別だけど…。

「お久しぶりです。アルミーシュさん」

「ああ。昨日は碌に喋れなかったからな。久しぶり、というか2年ぶりくらいか…」

「2年は長いですよ。以前はちよくちよく帰ってきてたのに…」

「前の任務が少し大変でな。長くなったんだ」

「むう…。まあ良いですけど…」

俺はそこで話を切ると、いままで話し掛けようとしていたエルドアと話す事にした。

「ミレイシス卿、でしたか…、お初にお目にかかる。私はエルドアと申します。よろしく願います」

「ああ。エルドアだったかな。そうお固くなくてもいい。気軽にア

ルミーシュと呼んでくれ。みんなもな」

「ですが…」

「そんな固くちゃ仲良く出来ないだろ？ 良いじゃねえか。エルドア」

「……わかりま「敬語じゃなくていい」…わかった」

「それでよろしい」

俺が軽く若者みたいに話すとエルドアも納得したようだ。
見た目おっさんに敬語で話されても困るし、キモイ。それに仲良く
したいしな。

「レナードもだぞ」

「…ああ。わかった」

「ユウリちゃんは……今更だな」

「はーい。わかってまーす！」

まあこの中で一番付き合いが長いのはユウリだと思うし……。とにかくこのままじゃ出発できないので早く行こうとしよう。

「リーダーはどうする？」

「俺はギルド長をやっているアルミーシュでいいと思う」

「わたしも」

「その方が良いでしょう」

何故かみんな俺が良いらしい。
まあギルド長だし？それも当然か…。

「まあ良いだろう。…それじゃあ、出発だ!!」

「「おー!!」」

「……………」

[illegible]

あゝ。早く戦艦が出来ればな。飛んでいけるのに……。まあ運動になるからいいか。

227

ちなみにレナードは片手剣、ユウリは弓矢を使っている。エルドアは魔法と片手剣だ。

ユウリも俺に少し学んだ魔法を使っている。といっても神聖、精霊魔法の初級ぐらいだ。

まあ使えたら使えたらで便利なので、これからも鍛えて欲しいと思う。

ヒールは大体の人が覚えていると思うので、レナードも使えるだろう。

防具はレナード、エルドアが盾を持っていて、レナード、ユウリはチェインメイルを着ている。

エルドアは既に着ているし、俺はギルドの服を着ている。これは中々丈夫なので安心だ。

みんなそれぞれ好みの色のマントをつけていて、その上にローブを着ている。

砂漠を通ることになるので、太陽光から身を守るためだ。ただ熱が籠るので、それはそれできつい。

「……で、大丈夫か？」

「……ハアハア。だ、大丈夫だ…」

結構モンスターが襲ってきて追い払うのに疲れたようだ。

ちなみに俺は戦っていない。俺が戦ったらこいつらの経験を積みせられないからな。

さすがにやられそうになったら助けるが、それ以外は手を出さない。といってもレナードは主人公だ。成長率が半端なくいい。俺よりかは低いかな…。

「まあ、無理はするなよ。無理でもして死んだら、もともこうもないしな」

「ああ。わかってるさ…」

「わかってるならいいさ…。さあ。先に進もう」

俺たちは地面に倒れている幾多のモンスターの屍を避けながら、アルバナ目指し歩き出した。

ちなみにモンスターの素材となる部分は剥ぎ取りました（キリッ）。モンスターの骨とか皮って売れるから、放っておくのは勿体無いしね。

さてさて。クレイドール平原を歩きつづけて二時間。
もう少しでノルディア坑道の入り口に着くというところなんだが…
…。

――――グオオオオオオオン！！！！

ええ。襲われてますとも。

そんな簡単に着くとは思ってないさ。だって主人公がいるんだよ？
困難がつきものなのさ。主人公ってもんはそんなもん。俺もよく襲
われたけどね。

相手は俺が始めてここを通ったときと一緒で、もちろんビッグマウ
ス。

いや、キモイ。気持ち悪いよ、こいつは。マジ不細工だわ。

レナードは頑張っておりますとも。ユウリも後方から弓を撃ってお

ります。

エルドアは二人を補助しながら戦っておりますよ。え？オレ？離れてお茶飲んでますけど何か？

だってコイツ弱いし。ここは戦わせないとあいつ等のためにもならんからな。

決して戦うのが面倒だからとか、疲れたとかではないと言わせてもらおう。

ま！冗談だけどね。俺がやっても意味ないし。まあ皆には頑張ってもらいたいもんだ。

おっと。ようやくあのでかネズミを倒したようだ。

コイツの死体は他のモンスターたちが処理してくれるだろう。

俺は3人に劳いの言葉をかけると、ノルディア坑道の入り口を目指し歩き出した。

ビクマウス襲撃そして撃退より2時間半。

俺たちはようやくノルディア坑道の入り口まで辿り着いた。

すでに太陽は赤く輝き、山の向こう側へと沈もうとしていた。

今日はここで休むことにして、俺たちはキャンプを張ることにした。キャンプを張った後は、火をおこし夕食を作ると、食べながら明日のことを話しあっていた。

夕食を終え、一息ついてしていると暗闇の空からビグロが飛んできた。

ビグロは地上近くまで滑空すると、エルドアの腕に止まった。

「ビグロか…。何処を探ってるんだ？」

「シズナ姫を追っていた。どうやら見つけたらしい」

エルドアは腕に止まっているビグロを近くに倒れている木に止まらせた。

するとビグロの目が光だし、ホログラムのような映像でシズナの姿が映し出された。

「シズナ姫!!」

「あら？あなたは先日…」

「レナードでございます。シズナ姫。そしてこちらが…」

「ユウリです」

「エルドアでございます。シズナ姫」

「アルミーシュです」

「え!?! な、なぜ、アルがそこにいるのですか!?!」

「べ、別にいても良いだろう…」

どうやらシズナはパニックっているようだ。
いまでも騒いでると思ったら、ぶつぶつ言い出した。

「こ、これはチャンスなのでは? 攫われた姫を取り返しにくる王子さま。きゃー／＼／＼／＼
それから二人はベットの所で……。は、ハレンチです!! で、でも…… (ぶつぶつぶつ) 」

「姫さま!?!」

「どうやらライバルのようね…（ゴゴゴゴゴッ！）」

「……………ふう。私は休むとするか…」

「おい！！シズナ！！勝手に妄想すんな！！というかレナード怖がりすぎだし、

ユウリちゃんも暗黒面に行くな！！つかエルドアも逃げんじやねえ！！」

その後10分くらいはこんな状態だっただろうか…。

復活した後、シズナに助けに聞く事を約束した俺たちは、映像を切らせると、

明日からの冒険のため、眠りについたのであった。

続く

第13話 いざ、出発!! (後書き)

少し短いような……。

その辺は気にしないでもらいたい。

そんな作者です…。

第14話 砂漠の街アルバナ（前書き）

おひさの白騎士。

お待ちしました。

短いですがじっくり見てってください。

どうぞ。

第14話 砂漠の街アルバナ

— — — — — side
アルミーシュ

次の日。

朝食を済ましたあと、ノルディア坑道を怪我なく無事に通り抜け、俺たちは痛々しいほどの太陽光が降り注ぐラグニッシュ砂漠へと辿り着いた。

「それにしても暑いな……」

「暑いというより、既に痛い領域に入っていると思うぞ、これは……」

俺はレナードの呟きに軽く返した。
しょうがねえじゃん。痛いんだもの。

「二人ともグズグズするな…私も暑い…」

「そうね……こんな中じゃ、敵と戦うのも大変ね…」

まあ俺は結構ここには来てるから慣れてるけど、こいつ等はキツイだろうな…。

エルドアはいいとして、他の二人はバランドール王国から離れた事もないだろうし。

「アルバナももう少しだ。いっちょ頑張ろうぜ!!」

「「……………おお」」

「……………」

……テンション低いね……。ま、いいけどね。

俺たちはその後、モンスターの幾度かの襲撃を撃退しながら歩きつづけた。

[illegible]

「ぐあゝゝつ、疲れたゝ……」

あれから2日。

休息を入れながらも歩き続けた俺たちは、とうとうアルバナへと着いた。

アルバナへとついた後、まずは宿へ向かった俺たちは2階の2部屋を借りると、

荷物を置き、1階の酒場で昼食を食べることにした。

とりあえず今後の事を話さなければならぬ。

原作ならカーラが例の酒場で襲ってくるのだが、この世界では俺がカーラを保護しているし、

まず襲われる心配はない。一応ギルド員にカーラを見張らせているが、いまのところ心配ない。

ウィザードの連中がカーラに接触してくるかと思ったが、俺の影響かいまは接触していない。

ふむ……それじゃあ黒騎士はどうなるんだろうか。まさかシャプー
ルか？

でもカーラから黒騎士のアークを強奪しなければ黒騎士は動かせない

いし、

それはまずないか…。まず契約者の奴以外にアーク自体に触れられないしな。

一応黒騎士のアークはギルドで探させているが、いまのところ何処にもなさそうなので、

多分だがグラールゼルが黒騎士のアークをすでに持っているんだろう…。面倒だな……。

「この後はどうするんだ、アルミーシュ」

「エルドアはどうしたらいいと思う」

俺はエルドアの質問に、質問を重ねた。まずはエルドアの意見を聞きたい。

「……そうだな。このアルバナにはドン・ガマローネという大商人がいると聞く。

商品に武器を扱っていたり、他にも合成という秘術を使うと噂を耳にしたことがある。

まずはそのドン・ガマローネに恩を売り、これからの後ろ盾を作ったらいと思うぞ」

ふーん、結構考えてんね。

「レナードとユウリちゃんは？」

「俺は直ぐにでもシズナ姫を助けに行きたい」

「私はまず休みたいかな。なんたって砂だらけだし、慣れないから疲れちゃった」

まあレナードは焦りすぎだな。何も準備なしに突っ込むのは愚者のすることだ。

「俺の意見としては、まずドン・ガマローネには会っというて損はないと思う。

というかドン・ガマローネの許可がないと南門から出れないしな。あとレナードは少し焦りすぎだ。焦ると判断が鈍くなって隙が出来やすい。

ユウリちゃんは、まあいいだろう。さすがに砂漠は疲れるだろうしな。十分休むといい」

俺は意見を言うで一先ず皆を見回した。

「ガマローネは俺がギルド初心者るとき会ったことがある。つてを使えば会えるだろうから、

また行ってみよう。それ以外にはまず武器や防具を交換するのもいいかな。

まだ使えるかもしれんが、武具を強くすれば生存率も上がってくる。

これはまた街に出るとき買っていこう。」

「ドン・ガマローネとはどうやって知り合ったんだ？」

「まあ、な……ちよつといろいろあつたんだよ」

だってただのプレゼントの素材だし……。いまは既に結婚してるしね。

たぶん次はイボンヌのラブレターだろうな、原作どおりなら。

「とりあえずこれからの事は少しずつ決めるとして……解散!!」

俺がそう言うのとレナードとエルドアは街の露店に行くらしく、ユウリは風呂に入るらしい。

俺は……そうだな……とりあえずカーラに会いに行くか!!俺は例の酒場へと歩みだした。

「そういえばどうしてここに？もしかしてバランドールの襲撃と関係が？」

一応カーラはギルドの所属しているので情報の回りが速い。幹部ではないが、結構上のほうになったらしい。

まあ俺と爺さんが鍛えたんだから強いのは当たり前だな。

「ああ。シズナ姫が敵に攫われた。この事は機密になっているから、誰にもいうなよ」

「あ、ああ。わかってる／＼／／／」

俺はカーラの耳元に顔を近づけると、小さな声で言った。シズナ姫が攫われたと国民に広まると、混乱するかもしれんなからな。

というか顔を赤くしてどうしたんだ？もしかして熱かな？

「どうした？顔赤くして…」

「い、いやなんでもない……………（ぼそ）鈍感……………」

「え？なんて言っただ？」

「なんでもない！！／／／／／」

「？まあいいけど…」

そんな怒鳴らんでもいいのに……。癩癩もちか？

「はあ…アル兄いは変わらないね……」

「そうか？少しは変わったと思うんだが…」

「まあそれはいいよ…」

おかしな奴だなカーラは。まあいいけど…。気にしないよ？俺は…。

「で、結局どうするんだい？アル兄いは…」

「ああ。それでなんだが、カーラ。お前もついてこないか？」

「わたしが？」

「俺の予想ではこれから時代が動くだろう。お前も自分の目で確かめて欲しいと思ってな。」

「どうなるかはわからんが、多分平穩は崩れるだろうな、この世界は……」

「……そうだね。この辺でも最近きな臭い感じになってきてる。戦争が近いね……」

「で、着いてくるか？」

「わかった。私も着いていくよ。愛するお兄様のためにもね……」

「なに言ってるんだよ……」

俺はそう言っているとカーラの頭をぐしぐしと撫でた。

「な、なにするんだい／＼／＼」

「絶対に死ぬな、カーラ。危ない時には逃げろ、絶対にだ……」

「……………うん」

「よし！！また来ると思うが、その時までには準備は済ましておいてくれ」

「わかったよ」

「またな、カーラ」

「ああ、また」

俺は踵を返すと酒場のドアを開け、外に出た。

続く

第14話 砂漠の街アルバナ（後書き）

短い……。

頑張ります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0249q/>

白騎士物語-新たな契約者-

2011年3月3日23時44分発行